通俗講義

霊魂不滅論

霊魂集說

非僧非俗道人　井上圓了講述

自ら靈魂不滅論に題す

余先きに世間の俗論を退治せんと欲し破唯物論と題する一書を著はしゝが哲學專門の學者は之を評して非科學的となし或は空想臆斷とおすも世間一般の人士は其論猶ほ高尙に過ぎて了解し難しとなす余是に於て破唯物論より一層通俗卑近の説明を世に紹介するの必要を感せり其後地方歴遊の際某所に於て死後靈魂の滅不滅如何を質せらる余之に答へて宜く破唯物論に就て見るべしと客曰く破唯物論は高尙幽玄にして淺學の輩其意を迎ふるに苦む願くは通俗平易に辯明せられんことを余乃ち有志の請に應して一夕靈魂の通俗談を試みたり今其考案を敷衍して一冊子と爲し題して靈魂不滅論と云ふ世の專門學者之を評して非科學的中の非科學的となすも余が敢て辭せざる所なり

今日學者を以て稱せらるゝもの多くは高尙の理窟を講して自ら之を樂み其言ふ所一般の人に通せざるを以て却て得意となす風あり余は

之を學者の利己主義と名く苟も世の學者たるものは廣く世人を敎化するを以て其任となすものなれば己れの知る所は廣く人をして知らしめ己れの樂む所は又廣く人をして樂ましめざるべからず是れ所謂學者の博愛主義なり然るに高尙の學理を通俗化すれば自然に非科學的とある傾向あり是れ又勢の免るべからざる所なり而して余は縱令非科學的なりとの批評を招くも其利己主義に陷らざらんことを望む請ふ讀者之を諒せよ

古來人の最も深く怪み且切に知らんことを欲するものは靈魂問題にして其問題たるや生死の迷の由て定まる所あり故に學者若し此迷を定むるに至らは實に博愛の大なるものと謂ふべし是に於て余は自ら信ずる所を通俗的に解說して廣く世の迷人に諭す所あらんとす若し專門の學者否利己的學者に對しては他日別に一論を草して大に雌雄を爭はんと欲す讀者併せて之を諒せよ

明治三十二年二月一日

通俗講義

靈魂不滅論

目次

第一回　發端　一丁
第二回　死後音信不通の事　五丁
第三回　靈魂は雲烟の如く消散する事　十一丁
第四回　人の死は燈火の滅するが如き事　十七丁
第五回　靈魂の有無は知るべからざる事　二十二丁

第六回　俗物連の靈魂滅亡論は五ケ條に歸する事　二十八丁
第七回　俗物論と唯物論との別　三十三丁
第八回　唯物論の根據とする三大則　三十八丁
第九回　物質中に精神を現すべき理を具する事　四十四丁
第十回　精神は原始の物質中に存する事　五十丁
第十一回　物質と精神とは判別し難き事　五十五丁

第十二回　精神は勢力進化の一狀態たる事　五十九丁
第十三回　世界は活物靈躰なる事　六十五丁
第十四回　精神海上に物質を現する事　七十丁
第十五回　唯心說の妙旨を玩味する事　七十六丁
第十六回　因果の規則によりて靈魂不滅を知る事　八十二丁
第十七回　死後精神の復活ある事　八十六丁
第十八回　死は猶ほ大眠の如き事　九十二丁

第十九回　精神の力よく肉躰の組織を造り出す事　九十七丁
第二十回　精神的原因によりて生死輪廻する事　百二丁
第廿一回　因果に善惡の別を生ずる事　百八丁
第廿二回　人間は空想を免れ難き事　百十三丁
第廿三回　世界の道理は人智を以て究め盡くし難き事　百十八丁
第廿四回　人の理性に滿足を與ふるの必要なる事　百二十四丁

第廿五回　理想の力によらざれば靈魂問題を究め難き事　百二十九丁
第廿六回　多苦多患の人に滿足を與ふるは靈魂不死說にある事　百三十三丁
第廿七回　人に得意の時と失意の時とある事　百三十八丁
第廿八回　靈魂不滅說の人心を强くする事　百四十三丁
第廿九回　靈魂不滅說の良心に滿足を與ふる事　百四十八丁

第三十回　歸結　百五十三丁
附錄
霊魂集說
第一　神道之部　百五十九丁
第二　儒道之部附雜書　百六十四
第三　佛道之部　百七十八

通俗講義

霊魂不滅論

非僧非俗道人　井上圓了講述

第一回　發端

近年西洋學の流行に伴うて、近眼の者ゞ俄に多くなりしは、何人もよく承知して居ることなるが、肉眼計りの近眼でなくて、心眼までが近眼になりたるは、實に驚き入りたる次第であります、其一例は世間の霊魂論に就て分りませう、先つ世間にて少々物知顔を裝うて居る連中は、十人中九人まで霊魂は肉體と共に滅し、死後の世界は決して

あるべからず、天堂地獄の說は妄談である、六道輪廻などは嘘八百を並べたるものである、釋迦は嘘つきの隊長、耶蘇も詐僞師の親方の樣に言ひ觸し、人間は一生五十年の間さへ都合よく胡麻化せば、夫にて足れり、宗敎などは野蠻未開の遺物、愚夫愚婦の玩弄物に外ならず等と申して居ます、是は全く當人の心が近眼病にかゝりて、死後までを見る力を失うて居るからであると考へます、尤も其連中の仲間には俗物もあり學者もありて、俗物の方は元手なしの議論であるから、彼是辯駁する迄ではあらざれども、學者の方はイヤニ屁理窟を并へ立て、尤もサウに見せかけるから、其儘に捨置くことは出來ませぬ、然し學者は

靈魂はない未來はないと云ふ迄にて、已れの道德品行を亂る樣なる恐はあらざれども、俗物の方は死後の世界も賞罰もないのを幸として、人間は政府の法律に觸れなければ、道德や品行などはドウデモよいと心得で居るから、是れ又捨置く譯に參りませぬ、サウして見ると學者も俗物も共に一征伐せなければなりませぬ、左れば是より拙者は俗論退治の大團扇を心の土藏中より取り出して、此等の蒼蠅を一掃してやりませう、ナント時節がら愉快の事でもありませぬか、若し拙者の御伴するものがあるなら吉備團子の一位は差上げても宜い、

斯く拙者が近眼連中を征伐するのは、敢て佛敎の爲に辯

護の勞を執る譯でもなく、耶蘇教の爲に應援する次第でもなく、儒教の爲でも神道の爲でもなく、唯拙者は此問題たるや國民の道德、社會の風教に關する頗る重大の事件にして、國家の獨立興廢にも影響する一大事なれば、決して輕々しく看過すべからざることと思ひ、眞理の在る所は何處までも推し究めて、世間の俗論輩と一大快戰を試み、刀折れ矢竭くる迄相爭ふ決心であります、先つ最初は俗物無學の連中を相手として論し、次に學者理窟家を相手として論しませう、今之を論する前ま一應御斷りを致して置きたいことがあります、其は別儀にあらず、靈魂の不滅を論ずるには、死後の世界の有無も地獄極樂の有無

も、共に論ぜざるを得ざれども、是れ唯現世の道理を以て推し測るより外なく、到底拙者の如き人間並の者が、其實況を面たり人に示すことは出來る筈はありませぬ、縱令其眞情を實視したる神や佛にても、人間に對して其實際を說くことは、恰も盲人に向て色の講釋をすると同樣なれば、是れ亦望み難いことである、其譯は後ま說明する積りなれども、豫め承知あらんことを願ひます、

第二回　死後音信不通の事

俗物連中の靈魂滅亡論を分析して見れば、色々役ま立たぬ理窟を並べて、靈魂は此身此躰と共に滅亡するに相違ないと申して居ます、其一つの理窟と、人の死後果して

靈魂の滅せざるものならば、必ず音信のあるべき道理である、然るに古來未だ曾て亡靈亡魂より何等の便りを得たる例ありしを聞きませぬ、是れ靈魂の存せざる明かなる證據であると申しますが、此の如きは子供騙の論法にして大人の笑草に過ぎませぬ、故に此論に對しては生憎死後の世界と現在の世界との間には、鐵道も電信もなく、郵便交通の便も開けて居らざれば、音信を致したくも、其路がないと答へて置けば宜い、畢竟俗物連中に現在の世界と死後の世界とは、其事情同一なる樣に考へて居るから、斯る誤りたる論を立つるに相違ない、然るに死後の世界は全く別世界にして、現在の世界と大に其關係を異にするを知らば、亡者より何等の音信なきは、恰も色の世界の實況を耳官丈具へたる動物に傳ふることが出來ぬと同樣にして、決して怪むに及びませぬ、尤も俗物には俗物の相手かありて、其者の申すには亡者の通信は慥かあある、其證據は何某は死後度々幽靈となりて人の目に現はれ、誰某は其友人の夢に入りて通信を與へたり等と稱し、或は古來傳ふる所の種々の感通談、奇怪談を並べ立てゝ、靈魂不滅論を證明せんと勉むるものがありますが、是は實に驚き入りたる次第ではありませぬか、其連中の話を聞けば、人の死するときには、其亡靈が必ず己れの寺へ參詣して、或は深夜人をきに戸を開き鐘を敲き、或は他人の

臥したる上を壓し、或は自ら知己朋友を訪ふかぞ、途方途轍もなき俗説を述へ、靈魂不滅の證據なりなどと云ひふらすには、實に迷惑千万と申さねばなりませぬ、良しや現に幽靈を見たる人ありとするも、其物は眞の幽靈ではない、眞の幽靈は目に見えぬ道理である、若し目に見えるものならば、幽靈と云はずに顯靈と申す筈である、幽の語たるや不可見を義とすることを知りませぬか、夫故に右樣の俗説は一として靈魂不滅の證據でなく却て邪魔物であります、要するに人の靈魂は死後永く存在するも、耳目等の感覺世界を脱して、精神の本境に入るものなれば、我人再ひ目を以て見るべからず、手を以て觸るべからず、況

んや其世界より通信を得んとするが如きは、到底望むべきことではありませぬ、

又俗物輩の申すには、死するは夜は入りて眠に就くと同樣である、眠は尚ほ醒むることあるも、死は永く醒むることなく、睡眠中は尚ほ身躰の活動を有するも、死後は全く其活動を失ふこと明かなれば、人の死するは眠るよりも、一層不覺無識の境遇に入るに相違ない、換言すれば人の死後は其靈魂永く暗黑に歸し、土石と同樣に意識の光明を失ふに相違ない、左すれば靈魂は肉體と共に滅亡すと斷言して宜いと論するものあれども、是れ決して靈魂滅亡論の證據にはなりませぬ、尤も其論は前の俗論に比す

れは、一歩を進めたるものなれども、學術上の立論とする價値のなきものでありまず、第一は人の死するときは、靈魂は意識の光明を失うて暗黑に歸すとするも、靈魂其者は依然として存する道理でありませう、例へは電氣燈が時々其光を失ふことあるも、電氣其物の滅したる譯ではないと同樣である、若し人の死を睡眠に比することを得るならば、一たび暗黑界に入りたる靈魂が、再び醒覺して意識の光明を發すべしと考ふることも出來、古代人間の一生を夢に比し、死は夢の醒むるときなりと申したる論も成り立ちませう、且つ縱令死時には一度不覺の境界に入らうとも、再び醒覺するときなしと斷言することは

出來ませぬ、殊に拙者等も靈魂は死後一時不覺の狀態より歸するものと信じて居ます、唯一定の時間を經過したる後再び醒覺することあるべきを信ずる次第であります、其理由は後に讓りて此では說明しませぬ、

第三回　靈魂は雲烟の如く消散する事

又俗物連中は、人間の一生は烟の現し雲の浮ぶが如く、其死するは烟の滅し雲の散するが如く、死後の靈魂は肉體と共に朽ち去りて滅亡するに相違ないと申します、是れ別段理由も道理もなく、唯一場の比喩に過ぎませぬ、其上に此論は却て靈魂不滅を證據立つることになります、何者雲烟は一たび散して其形を失ふも、決して眞に散した

るにあらざれば、他日更ゝ其形を現することがあります、故に若し靈魂を之ゝ比するを得ば、死後再ひ此世界ゝ其作用を現することありと斷言して宜い、且つ俗物連中も、世界の事々物々は一として眞ゝ滅するものでないことは、万々承知して居らるゝに相違ありませぬ、其證據は已れの財布に十圓札を入れて置きたるゝ、翌朝其中ゝ見ざる場合ゝは、何と申しますか、必ず人に盜まれたるゝ相違ない、何せなれば一旦ありしものが、なくなる道理はないからと申しませう、是れ獨り財布の中の金計りでなく、一切の事物に通して居る規則であります、若し之を學術上の言葉ゝて申せば、有を轉じて無となすべからず、無を

化して有となすべからずと云ふことになります、此規則は有らゆる學術の本つく所の大道理なれば、如何に俗物の人達が集りて彼是申したとて、此道理を動かすことは出來ませぬ、縱令鴨川は北に向て流れ、太陽は西より出づることがあらうとも、此道理丈は決して變る氣遣はない、サウして見れば、靈魂は不滅なるに相違ありませぬ、何せなれば靈魂とは人の精神のことゝして、精神は生時に實在して居ることは誰れも疑うものはありますまい、其一たび實在したるものが、死と共に滅するならば、是れ有か變じて無となる道理なれば、宇宙の大規則に悖るではありませぬか、實に不都合千万の斷言と申さねばなりません

ぬ、俗物連中か財布の方には此規則を當(あて)はめなゞら、靈魂の方は之を當はめぬのは、俗物の俗物たる所以かは知らざれども、餘り目のない判斷の樣よ考へます、故に拙者は宇宙の大規則に從ひ、人の死するや、靈魂は一たゞ散して雲の如く烟の如く消滅し去らうとも、其消滅すと申すは、人目に觸(ふ)れぬを意味するまでよて、決して眞に消滅する道理なしと確(かく)信するものであります、尤も哲學上にては唯物派と名くる一派がありて、人の生時ですらも物質の作用を離れて精神なしと論ずるものがありますが、此論は生時に於て已に精神の實在を許さぬものなれば、死後に靈魂の實在を許さぬは、無を化して有となすべからざる規則に本くものと考へて宜い、故に是は俗物輩の論とは同日の比ではありませぬ、今左に其兩者の別を列すれば、

俗物輩は人の生時に精神ありて、死後に靈魂なしと云ふ、是れ有を轉じて無となすべからざる道理よ反す、

唯物派は人の生時に精神なく、死後に靈魂なしと云ふ、是れ有を轉じて無となすべからざる道理に反せず、

右樣の相違があるから、唯物論の方は一理ありと許すも、俗物論れ方は氣の毒ながら決して許すことは出來ませぬ、然し唯物論も不合理の俗論なることは、後よ至りて說明する積りであります、

之れと同じ道理にて、俗物連中が毎に靈魂は肉體と共に滅亡をと申すけれども、肉體は死後朽ちて土とならうとも燒けて灰とならうとも、決して滅することはありませぬ、是れも有を轉じて無となすべからざる大原則に本つくものゝようして、唯年を歴、時を經る間に、其狀態を變するまでゞあります、若し靈魂は肉體と其存否を共にするものならば、肉體の不滅なること明かなる以上は、靈魂亦不滅と申さねばなりませぬ、其論理は左の通りであります、

靈魂は肉體と共に生ず、
然るに肉體は死後永く不滅なり、
故に靈魂も亦死後永く不滅ならざるべからず、

要するに俗物の靈魂滅亡論は、却て不滅論を證明することになりますから、俗物の人達に向て、御苦勞千万の一言を呈さねばなりますまい、

第四回　人の死は燈火の滅するが如き事

俗物連中の靈魂説も、段々進て多少理窟めきたる論を立つるものがありますが、其一つは人の死するときに精神即ち靈魂の滅するは、恰も燈火の滅すると同樣であると申します、此論によれば、人の生時にありて身體中に精神の存するは、恰も燈心に油を注げば、燈火の光を發するが如く、人の死時に精神の滅するは恰も油盡きて燈火の滅するが如く、精神は之を燈光に比し、肉體は之を燈心に比

する説てあります、此説は前に述べたるものよりは、一歩も二歩も進みたる論にして、先きの所謂有を轉して無となすべからざる原則に背きて居ませぬから、俗物輩の立論としては、天晴の上出來と申して宜い、然しながら其論は唯物論を根據とし、精神を物理作用と同一視したる論おれば、不合理の立論たることは言ふ迄もありませぬ、第一に人體の精神に於けるは、燈心の燈光に於けるが如しと云ふは、一種の比喩に過ぎざれば、更に一方の理を推して他を測ることが出來る所以を證明せねばなりませぬ、若し其證明のなき限りに於ては彗星の見ゆるは國乱の兆ありと判斷する百姓論法と、同一種のものであります、

縱令其證明は効力あるものと許すも、燈心と油とを合すれば火を發する力あることは、燈光の明滅に拘らず、其理は依然として存するに相違なきが如く、肉體の組織一たび破るゝと共に、精神一たび滅するも、肉體の組織再び成ると共に、精神再び生すべき理は、必す存することと定めねばなりませぬ、若し他の例に徵するに、木と木とを揉み合すれば、火を發すること實事なる以上は、其相合せざるときにも、火を發すべき所以の理を具することは、打消されぬ道理である、之れと同しく肉體の組織相合するときに精神作用を現する以上は、其組織破れて各部分の分解するに至るも、精神作用を生すべき理は、依然として存するに

相違ないと考へます、然し此事は唯物論に對する答辯なれば、後に學者相手に論するとき迄見合せる方が宜い、

俗物輩の靈魂論は、一般に獨り死後の存否のみを論して、其由て來る本源を窮めざる風がありますゞ、是は俗物の俗物たる所以と申せば致し方なけれども、決して道理上の説明とは云はれませぬ、凡そ何事でも其道理を窮めんと思はば、先つ其本源を知り、更に泝りて本源の本源を明かにせねばならぬ譯であるから、靈魂の問題も死後の如何よりは、人の始めて生るゝときは何れより來り、如何して生したるかを知ることが肝要であります、若し我々の靈魂は父母から傳はるとすれば、父母の靈魂は何れより湧き出てたるや、父母の父母は如何、其又父母は如何等と泝りて、結局人間の祖先は勿論、天地万物の本源實體如何を究め盡くさねば、靈魂問題は分らぬことになります、故に其問題は宇宙の大問題でありて、鹿嶋の要石と同しく、底の知れない問題である、否要石の底は知れても、此問題だけは知ることが六ケ布い、斯る廣大の問題たるにも拘らず、俗物連中は一二の比喩を擧げ、一言半句で説き去りて、大に分りたる樣に極込て居るのは、諺に所謂盲人蛇に畏ぢと申すものでありませう、若し果して其位に容易いことで此問題か分る樣なら、東西の學者が數千年の久しき、思を勞し心を苦むる筈はない、必すや早い昔しに分て

しまふ筈であります、俗物連中も定めて孔子の言葉を記臆して居ませうが、未た生を知らす焉そ死を知らんと云はれました、實に其言の如く死後の事を知る前に、生時の事が分らねばなりませぬ、然るに生時の事の分らない連中に、死後の事が分る道理がありませうか、是等の連中は皆孔子様の御叱りを受けるに相違ない、

第五回　霊魂の有無は知るべからざる事

又俗物の人達が申すには、死後の事は我々の力で分らぬなら、霊魂の有無共に分らぬ道理である、若し有无共に分らぬならは、其結果霊魂なしと極めても別に差支はない、且つ死後霊魂の復活あると定めても、其復活世界にあり

ては現在世界の事は全く分らぬに相違ない、若し其事が分るならば、佛教にては過去世界のあることを説きますが、現在世界に於て前世の事が知れる筈である、然るに其知れざるは、未來にありて現在の事が分らぬ證據である、其様に霊魂は三世の間に不滅でありても、意識及記臆の連絡が全くないなら、現世の霊魂は肉體と共に一代限りのものと定めて毫も不都合はありませぬと、是れ亦一理ある様なれども、其實似て非なるものであります、第一に我々の力で死後の境遇如何を明かに知ることは出來ないけれども、霊魂は三世に亘りて不滅なるべき道理は必ず分ります、又死後にありて今世の事が知れるか知れぬ

かは別問題にして、最初に不滅問題を決して、後に論すべきものなれは、靈魂滅亡論の口實とはなりませぬ、若し記憶の連絡の有無を論するに至りては、何ぞ現在世界と未來世界との間のみでなく、現世一代の間にも記憶の連絡は覺束ない、我々の記憶中には十歳以前の幼時の事は曉天の星の如く、微かに二三を想起するに過きませぬ、況んや五歳以前の事に至ては、全く無記憶と申して宜い、今より幼時を回想すれは子供の間は年中眠りて計り居て、二三年目に僅に一二度位目を醒せしかの如くに考へられます、是れ拙者計りでなく、誰れも同樣であらうと思ひます、世間にて佛教の三世說に對する俗難中に、過去世界の存せざる證據には、己れの心中を何程尋ねて見ても、更に前世の記憶を見出さぬではないかと申しますが、拙者は之に對して己れの記憶に考へて知れないことは、すべて無いものと極て宜いならは、一二歳の赤兒の頃及母の胎內にありし時の事は記憶上に覺えがないから、余は母の胎內に宿りしことはない、一二歳の赤兒の時もなく、空中より急に飛ひ出して直ち五六歳以上の童子になりたるに相違ないと定めて宜い道理であると答て居ます、是は三世の實在に就ての問答でありますが、其論點は人間一生中ですらも、記憶の連絡は覺束ないのに、現世と來世との間の連絡は無論覺束ないと申す立論であります、此理

を推して考ふれば、記臆の連絡がないから靈魂は一代限りのものと定めて宜いと申すのは、不道理なることが分りませう、換言すれば記臆の有無に拘らず、靈魂其者が不滅である以上は、決して滅亡論と同一視すべからざるは無論の事と考へます、

又此に一論ありて、死後の世界の有無は未だ孰れとも決し難げれは、之を有りとして餘計の心配するよりは、寧ろ之を無しとして安心する方が宜いと申しますが、是れも俗物論の一である、先つ其論の不都合なる點は、人の安心は死後の世界の存するに由て得らるゝか、無きに由て得らるゝか、拙者は之を無しとする方却て人に不安心を與ふることと考へます、尤も惡人は來世の無い方を喜ひませうが、苟も寸善尺德を爲したる記臆あるものは、來世の存するを聞きて安心するに相違ない、良し其問題は別論として考ふるも、未來世界の有無未た判然せざるに、強て之を無しと定めたならば、却て不安心となりて、餘計の心配を引起し、若し之を有りと定めたならは、必す安心することが出來ませう、其例は晴雨の判然せざる日に旅行するに之を雨天と定めて雨具の用意して出づると晴天と定めて其用意なきと、孰れか安心なるやと問はば、誰れも雨天と定めたる方安心なりと申すに相違ない、今は之れと同じ道理であります、

第六回　俗物連の靈魂論は五ヶ條に歸する事

以上數回を重ねて述べたる所は、俗物連中の盲不畏蛇的の論法を以て、死後の世界を否定し、靈魂の滅亡を主唱する要點を擧げて、一通りの辯駁を試みたる積りであります、今其點を一括して示さば、

第一は死後亡者より何等の音信なきこと、

第二は人の死するは夜に入りて眠に就くが如く不覺無識となること、

第三は靈魂は雲の如く散し烟の如く消すべきこと、

第四は人の死は燈火の滅するが如くなること、

第五は靈魂の有無は人力を以て知るべからざること、

右の五ヶ條に歸しませう、依て拙者は之に對する一應の答辯は述べましたれども、段々其論を推し究れば、學術上の所謂唯物論となりて、今日の學者間に行はるる靈魂滅亡論と一致する樣になりますから、委しき答辯は後に至りて述べませう、其他俗物連中より未來世界の地獄極樂說に關しては、色々の盲評を與ふるものあれとも、其價二束三文にも當らざれば、一々答辯する必要はありませぬ、其一例を示さば地獄の鬼は皆虎の皮の褌を締めて居るが其皮は何處より得て來たか、地獄の釜は何處にて造りしか、閻魔の衣服は支那風なるは如何、極樂の佛は池中の蓮華の上に坐するが、若し蓮華が折れて池中へ落ちたな

らは如何等の愚論でありますが、斯る愚論は多少知識のある者の取らざる所なれば、其言ふ通りに任せて置て差支はありますまい、尤も從來の佛教家は此愚論に一々答辯して、却て愚論に愚論の上塗をして居るのは、實に憫然の次第に思はれます、すべて地獄極樂の莊嚴形容に渉りたることは、其苦樂の一端を知らしむる爲に我々の感覺に訴へたるものに過きざれば、是れ固より枝末の事にして、之を彼是評する、もの、も、又其愚評を相手として辯明するものの、も、共に愚論の仲間に入ることになります、唯此に一問題として爭ふべきは、死後の世界は地獄極樂の如き苦樂の兩界が果してあるべきや否やの一論でありませう、是に於て靈魂問題が二樣に分れます、

第一は靈魂は不滅なりや否や、

第二は若し不滅とすれば地獄極樂の如き苦樂の兩界存すべきや否や、

此二題に關係して佛教の所謂三界流轉六道輪廻說の一問題も起りませう、以上相合すれば都合三問題となりますが、拙者は是より學理上靈魂不滅を說きて、漸く其第二第三問題に及ぼす積りであります、

從來佛者が俗物相手に辯護する所を見るに、實に捧腹に堪ゆざるこが多い、其一例は只今の第二問題に就ては、越中の立山に火氣を噴出する塲處あるは、地下に地獄の存

する證據なりと云ひ、在昔何國の何某は一旦絶命して再ひ蘇生する間に、或は極樂を見、或は地獄を訪て歸れりと云ひ、又第三問題に對しては死したる子供を葬る時に其足に墨を印して置けば、必す其次に生るゝ子の足に同し印を持して居る、是は再生の證據なれば、人間は幾回も此娑婆に生れて來るに相違ない、六道輪廻も此例によりて分ると云ひ、奇々怪々の妄談を集め來りて、辯護する樣に見受けられまするが、是は却て佛敎の爲に迷惑千万の次第であると考へます、故ま拙者は只今の第一問題は勿論、第二第三に答ふるにも、すべて今日の學理に照して辯明する積りであります、

是まで述べ來りし事は、俗物連中の不學無識輩の難問に答へたるまでなれば、格別の理論も說かざりしも、是より學者連の屁理窟に對して辯明する筈なれば、多少の理窟を並へなければなりますまい、偖て今日我邦にありて自ら學者大家を以て任する人達は、過半處ではなく十人中九人迄は靈魂滅亡論者ならんと考へます、尤も靈魂の解釋如何によりては、不滅論に歸する人もあらうかなれども、神道や佛敎や耶蘇敎の如き古來の宗敎上にて立つる靈魂說に對しては、皆反對論者ならんと察します、而して其論の詳細に至りては、十人十色なるべきを以て、之を一

概し難しと雖も、若し其多數の傾向を見れば、唯物無心論に本つくと申して宜い、依て最初は唯物論の一端を說明せねばなりませぬ、

先きに述べたるが如く、俗物論と唯物論とは往々一致する所あれども、又大に異なる所あれば、左に其異同表を示しませう、

第一に甲(俗物論)は不學無識の俗物連の唱ふる靈魂滅亡論にして、乙(唯物論)は多少の知識學問を有する學者の唱ふる無心論なるの別あり、

第二に甲は生時は精神の實在を許して、死後に靈魂の不滅を否定し、乙は生時死後共に肉體の造搆組織を離れて精神靈魂の存在を否定するの別あり、

第三に甲は單に死後靈魂の滅亡を說くのみにて、毫も其起原由來に就て論せず、乙は唯物無心の原理より廣く万般の事を論するの別あり、

斯くして先づ唯物論の大要を述ぶれば、此世界には物と心と並ひ存することは誰れも承知して居るが、此物と心との二者共に實在せりと立つる論を哲學上にては物心二元論と申します、通俗の靈魂不滅論者は勿論、俗物の人達は皆二元論者に相違ない、縱令靈魂滅亡論を唱ふるにもせよ、生きて居る間は肉體と精神と共に存することを許す以上は、二元論の仲間であります、然るに此物

心二元の本源實體及二者の關係を論するに當り、段々推し究めたる結果、遂に二元ではなく一元であると申す論が起りました、其一元論中にも細別すれば幾通りの學說もありて、或は神を以て二者の本源とし、或は眞如を以て其實體とし、或は物質を以て精神の本據とし、或は精神を以て物質の大元とする等、一々數へ盡くすことは出來ませぬ、而して此物質を以て精神の本據とする論を唯物一元論と稱して、物質の外に精神なく、精神は物力の變態に過ぎざる樣に申します、之に反して精神を以て物質の大元とする論を唯心一元論と稱して、精神の外に物質なく、物質は精神の現象に過ぎずと申します、此唯物論と唯心論とは古來の大敵手として、互に相爭ふて止まざるは、決して今日の自由黨と進步黨との爭の比ではありませぬ、今我邦に傳來せる神儒佛三道は唯物とも唯心とも判定し難きも、稍唯心論に近き方にて、就中佛敎は一種の唯心論と申して宜い、而して拙者も唯心論の一派なれば、唯物論とは積年の敵味方の間柄であります、依て拙者は神儒佛三道の諸君と共に飽まで力を戮せて唯物論の內閣を打毀ち、唯心內閣を造ふねはなりませぬ、中々其困難は藩閥內閣を打毀つよりは一層六ケ布からうと思ひます、何ぜなれば今日の唯物論は其本城を西洋の學術社會に置き、百科の理學を己れの炮臺として其根據を守る上に、我

國の中等以上の少々學問髯の生へたる連中は、多く其方に味方して居ることとなれば、之を攻撃するの困難は言ふまでもなきことでありまず、然れとも如何なる勁敵たりとも毫も恐るゝに足らざることとなれば、是より手に唾して唯物論者の執る所の無心論を退治してやりませう、

第八回　唯物論の根據とする三大則

凡そ敵を仆すに二通りの仆し方がありて、己れの武器を以て敵を仆すは仆し方の拙なるものにして、敵の武器を奪て之を仆すは上乘の方でありまず、依て拙者は唯物論者の武器を奪て、其根據から打破らうと思ひまず、先つ其武器を考ふるに彼は理化學の實驗を本城とし、理學一般の原理たる物質不滅と勢力恒存との二大則は、其唯一の武器として恃む所なるに相違ない、物質不滅とは先きに述べたる有を轉して無となすべからずと申す規則と其意を同うし、一切の物質は外面上にては色々の變化を示し、固躰は轉して液躰となり、液躰は化して氣躰となり、氣躰亦變して液躰固躰となるも、其實一分子一元素たりとも、決して眞に消滅することなしとの規則でありまず、又勢力恒存とは物質の固有せる勢力も、或は運動となり或は熱力となり或は運動力となりて、色々の變化を呈するも、同一く不滅なりとの規則でありまず、而して勢力と物質との關係に就ては、前者は後者に附屬して居る樣に考

へて居るのが、唯物論者の立方であります、其外唯物論者は物質の變化を論するには、必ず因果の規則を應用するを以て、因果相續の理法も其武器の一なるに相違ない、依て拙者は物質不滅、勢力恒存、因果相續の三大則を以て、唯物論の恃む所の唯一の武器なり砲臺なり軍艦なりと定め、此三道具を取り出して唯物論を攻撃する積りであります、

右攻撃の進軍喇叭として、前以て唯物論の誤解の一二を述ぶれば、其論者口を開けば直に物質の外に精神なしと、論ずれども、精神なくして如何して物質の存在を知るであらうこの、論者自ら徹頭徹尾精神の光明の中にありて論じ居るにあらざるか、其自ら物質として認めて居るものは、精神の表象にあらざるか、夫等の點に就ては更に考察を下さゞして、唯物質より精神を現する一方のみを守りて居るのは、諺に所謂頭かくして尻かくさゞる間抜議論と申さねばなりませぬ、且つ又唯物論者は最初より物質は實在せる眞躰ありと假定し、其點に就ては更に證明をも與へず、自證自明の眞理の如くに崇め奉りて居るのは、一種の拜物教と名けて宜い、唯物論者は今日の高等の宗教を排斥しながら、己れは上古未開時代の拜物教の同類であるとは、サテモ〳〵驚き入りたる次第ではありませぬか、其他唯物論の不都合なる點は、頗る數多いことなれ

ども、扨は拙者の別に講述せる破唯物論の方に譲りませう、

拙者等の唯心的眼光を以て觀れば、我々は生れてより以來、精神の光氣の中に此世界此物質を認めて居ることは、決して爭はれぬ眞理である、若し精神を外にして世界を知らんとするは、己れの手で己れの躰を擧けんとするより猶ほ困難であると考へます、サウして見れは唯物論者は物質の前に精神の實在を認めて置かゞはならぬ道理である、然るに物質を以て精神の實在を否定するは、頭上へ靴を戴き脚下に帽を穿つか如く上下顚倒の立論たるを免れませぬ、此の如く己れの立論の不都合なるにも拘らず、人の精神は腦髓中の何處に存するかを知らんと欲し腦髓を分析して色々吟味すれども、物質分子元素の外更ほ精神の存するを認めず、是れ物質の外に精神なき故なりなど、斷定するに至りては一驚は愚の、百驚を喫せざるを得ざる次第であります、抑、精神は無形無質のものなれば、理學上の分析や試驗で耳目に觸るゝ筈はない、若し夫れが分るなら、鼻を以て音聲を聞き分け、耳を以て香臭を嗅ぎ分けることも出來る筈である、若し又精神の所在を知らうと思ふなら之を外に求めずして内に顧れば直に分りまを、其精神の所在を尋て居る御主人樣が、即ち精神であることが分りませぬか、然るに他人の腦髓などを

解剖して知らんと欲するが如きは、或る寐惚老爺が已れに眼鏡を懸けて居ることを知らずして、切りに自分の左右を見廻して眼鏡を尋ねて居ると同樣でありまず、唯物論者も其樣に寐惚て居ては困つたものではありませぬか、

第九回　物質中に精神を現すべき理を具する事

偖て是より唯物論の第一則たる物質不滅の理法に就て論ぜるに、拙者は決して其理法を攻擊する處ではなく、却て之によりて靈魂說を立て、併せて唯物論を排する積りでありますから、唯物論者は物質の外に精神なしと申すなら、假りに其說を眞理と許して考ふるに、物質已に不滅なる以上は、我々の肉躰は生前と死後とに渉りて、毫も增減生滅のあるべき筈はない、左すれは其論は矢張り靈魂不滅論となりませう、何せなれは縱令精神は物質の作用にもせよ、物力の變態にもせよ、我々の生時にありて精神作用の存することは、決して否定することが出來ますまい、サウすると物質の解釋の仕方によりては、精神は物質中に存する樣に考へても宜い、而して物質全躰が不滅ならば、其中に存する精神も亦不滅と考へて差支ない、斯く申さば唯物論者は必ず答へて、人の生時の精神は別に一種の精神分子の如きものあるにあらずして、物質の作用に過ぎざれば、死時肉躰が活動作用を失ふと同時に、精神

は滅するものである焉ぞ之を不滅と許すべけんやと云ふに相違ありませぬ、然らば且らく其説に從ひ、精神は物質の作用に過ぎずとして考ふるも、物質の組織其宜きを得るに至れは、必す精神作用を生することと定めゝばなりますまい、已に斯く定めたる上は、人の死時一たひ物質の組織破れて、精神の作用を現せざるに至るも、他日再ひ物質が適當の組織を有するに至らは、再ひ精神作用を現するに相違なく、若し前時と寸分も異なることなき組織を有するときは、前時と毫も違はざる精神作用を發するに相違ないと考へます、果して然らは肉躰死して精神一たび滅するも、是れ眞に滅するまあらずして、一時其作用を休止したるまでありと解して差支ない、換言すれば苟も物質相集りて精神作用を生する事實ある以上は、物質其躰の中に常に永く精神作用を生すべき理は依然として存するに相違ない道理であります、依て此説も靈魂不滅論の一種と定めてよからうと思ひます、縱令靈魂は不滅ありと申すも永き年月の間常に斷へず働く譯ではあく、時々休止中絶するものと定めて差支ない、已に人の一生中にても、夜中熟眠の時は勿論の事、其他折々精神の作用を中絶することあるも、猶は一生中は精神不滅なりと申すではありませぬか、左すれば死後永く其作用を中絶することあるも矢張り不滅と云て宜いと考へます、且つ

此に一例を擧げて示さば若干の柱と石と壁と瓦とを結合すれば一棟の住家が出來る以上は、之を分解すると同時に住家の形を失ふも、尙ほ其若干の柱石等の中には、一棟の住家を現する理は依然として存するに相違なく、他日此等を集めて再ひ結合すれば、再ひ同一の住家を見るに至る以上は、其理は永く柱石の中に存すと申して宜い、之と同しく物質其物の中に精神を再現する理を具する以上は、精神不滅の理は物質中に永く存すと申して差支なからうと考へます、

唯物論者は更に之に答へて、我々の肉躰は一たひ死滅に歸する以上は、決して再ひ其形を結ぶことなしと申すかも知れませぬ、然れとも假りに人身は甲元素何及、乙元素何及、丙丁各何及つゝ集りて出來るものと定むるは、無限の歳月無窮の時間の間には、之と同一の割合を以て各元素の結合することなしとは申されまい、之を天地自然の進化に一任するも、必ず斯る割合あるべき道理と考へます、例へは支那の文字の五万も十万も數多き中から、二十八字を取り出せば、月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、の詩か出來るとすれば、之を自然に任せても、無數回かゝりて二十八字づゝ取り集れは、必ず再ひ之れと同しき詩か出來るに相違ない、此例に照して人の精神の再現を知ることが出來ます、

○第十回　精神は原始の物質中に存する事

唯物論にて物質より精神を現することを説くも、我々の精神は器械的に造り出すことは出來ない、縱令何程巧妙を究めたる技術師ありても、物質分子を集めて人間を製造することは出來ない、必す親祖先ありて子々孫々の間に相傳へなければなりませぬ、サウして見ると唯物論の主義を立つるには、先つ物質中に精神作用を初めて現せし太古に沂りて考ふることが肝要である、是に於て人間の先祖調が始ります、斯くして先祖の先祖を尋るに、近來は一般に進化論を以て説明する樣になりましたから、唯物論は無論進化論を取るに相違ない、若し進化論により

て考ふれば、人獸動物は同一の先祖より分派したりと申すから、精神の大元は動物初發の時に沂らなければなりませぬ、然るに又動物と植物と其祖先一なりと申すから、生物全躰の起原に沂らざれば、精神の本家本元は知れない、斯くして生物の本元に達すれば、更に唯物論者は生物と無生物とは其起原一なりと申すから、精神の本籍調は遂に太古未開の無生的物質中に考へざるを得ざることになります、斯くして精神は太古の物質中に存するを知れば、無生的物質の中に精神の胚胎することが分りませう、若し其胚胎なしとすれば、次第に進化開發して或る程度に至り精神を現出する筈はない、今其進化の順序を表

によりて示せば、

原始的物質
- 無機
- 有機（生物）
  - 無感（植物）
  - 有感
    - 無智（動物）
    - 有智（人類）

右の通りでありますが、果して此順序を開發したるものとすれば、原始的物質の中には精神も生活も感覺も智力も具存して居る道理である、左なければ無より有を生ずるが如き不都合が起り、物質不滅の原理までに傷をつける樣になります、是に由て考ふれば、人間の生死に關せず、物質中には常ゐ精神を具することが分り、之と同時に精神不滅のことが分ります、

斯く申すと唯物論者は更に負惜を言ひ出し、物質中に精神を具すると云ふ道理はない、物質進化すれば途中より偶然精神作用を現出することあるのみと申すに相違ない、拙者は之に答へて梅の種子が發育すれば、或る程度より葉を現し、更に花を顯はすを見て、此葉と花とは最初の種子の中には具して居らないものとするか、然るときは無より有を生ずることになります、若し無より有を生ぜざるものならば、櫻の種子にても大根の種子にても芥子の種子にても、之を發育して其中より梅の葉や花を現ぜしむることが出來さうのものであるのに、其出來ざるは、梅の葉や花は梅の種子の中に具ぜて居て、櫻や大根の

種子の中には具せざる故であります、此理を推し擴めて申せば、原始の物質中に精神を具して居ることは疑ありませぬ、斯くして原始の物質に精神を具することを知れば、今日の物質にも具する道理である、何せなれば原始の物質と今日の物質とは物質其物に不同がないからであります、又物質不滅の理を推せば、原始の物質は原始より存在すと云はゞならぬと同時に、其中に具する精神も無始より存在すと云ふて宜い、何せなれば無始時來太古の祖先より子々孫々相傳へて今日に至れる精神が、我々の一生を限りとして滅亡するならば、始めなきものに終りあることになり、物質不滅の規則に背く譯になるから

であります、之を要するに物質不滅の理確實なれば、之と同時に精神不滅の論が立つに相違ありませぬ、

第十一回　物質と精神とは判別し難き事

此の如く段々論じ來れば、物質其物は何物なるやを究むることが却て先決問題となります、依て此に物質問題を提出致しませう、之を決するに記名投票でも無記名投票でも搆ひませぬから、成るべく日程を變更して早く議してもらいたい、之を議されては定めて唯物論は困るに相違なけれども、靈魂論を立つるには是非之れが先決問題でありますが、唯物論者は最初より物質は正眞確實のものにして、一點の疑を容れざる樣に信仰して居ますけれど

も、拙者等の唯心的方面より之を視れば、物質は奇々怪々不確不實のものと考へます、其故は唯物論者に物質の如何を尋れば、若干種の分子若くは元素より成ると答ふるも、其元素たるや奇々怪々不確不實のものにして、其何たるやは誰れも知らざる所あれば、其形は如何に微小なるも、大怪物でありまず、其者たるや有形なるか無形なるかも明かに知れませぬ、之を假りに有形とすれば、其以上の分析も出來る道理にて、元素の元素がある筈なれども、元素の元素に至りては一層分らぬに相違ない、然し其躰尚は有形とすれば、更ゝ分析分割の出來る道理である、何せなれば有形とは廣延を有する所以にして、苟も廣延あれは分割の出來る道理でありまず、斯くして再三再四、分割の上に更に分割して、無數回の終り最小至微の極點に達し、復た分析すること能はざるに至れば、廣延なきものとなりませう、而して廣延なきものは物質とは言はれぬから、其躰非物質性となりまず、其譯は物質の特性は廣延を有するに外ならざれば、已に物質にして分析の極、廣延なきに至れば、非物質となるより外なきは勿論でありまず、然るに精神は本來廣延なきを特性とするものなれば、物質にして廣延なきに達すれば、精神と相別つこと能はざるに至りまず、之を換言すれば、物質分析の極、精神と同しく無形に歸し、物心の二者其別を見ざるに至り、物質不滅

の規則は變して、精神不滅の規則となります、

斯く論し來るときは、唯物論者は必ず之に答へて、物質は何程分析しても決して無廣延に達する道理はないと申しませう、左すれば其點は暫く預り置きて、他の點より論ずるも、同し斷案に達します、抑物質乃物質たる所以は、色聲香味觸の五種の性質を具するに由ることは唯物論者も否定することが出來ますまい、而して此五種の性質は眼耳鼻舌身の五種の感覺より生ることは、又決して疑れませぬ、例へば此に一幅の繪畫ありとせんに、其繪畫は墨朱等の繪具彩色より成るものなれば、彩色を離れて繪畫はないと同樣でありますが、果して物質は五種の感覺の上に現立するを知り、感覺を離れて物質なきを知るに至れば、物質其物に廣延なきことが分りませう、此の如く段々推し究れば、物質と精神との區別も判然せざる樣になります、

斯樣に論し詰めても、猶ほ貪惜の強い唯物論者は、物質は廣延なきに達しても、精神とは大に性質上の相違がある、何ぜなれば精神は唯無廣延であるのみならず、意識思想を其特性とするものであると申しませう、此點に達すれば物質問題は一變して勢力問題となります、是に於て拙者は勢力恒存の規則に本きて、更に靈魂不滅を論じませう、

第十二回　精神は勢力進化の一狀態たる事

唯物論者は精神は勢力の變態、或は勢力の進化の樣に說き、生活も感覺も意識も思想も皆勢力の分化の樣に唱へますが、之に對しては古來色々の難問があるに拘らず、兎に角一理ありと許すも、猶ほ大に解し難いことがあります、一躰唯物論者は我田へ水引流義にて、元來物質崇拜宗なれば致し方はなけれども、勢力は物質の奴隷か臣僚の如くに考へ、何にも歟も物質の本尊樣へ結び付け樣と致します、然るに物質と勢力とは其間は相離るべからざる關係ありて、物質を離れて勢力なく、勢力を離れて物質なしとは、實に理學の格言なれば、其中孰れが主人とも居候とも下女下男とも申されませぬ、ツマリ同等同權でありませう、拙者の考では此二者は其相離るべからざる點よりは同等同權なるべきも、若し其位次を論ずれバ勢力の方却て主人にして、物質は之に附隨せるものと思ひます、之を喩ふるに夫婦の關係と均しく、勢力は亭主にして主人の位置に立ち、物質は女房にして之に附隨するものでありませう、何故なれば段々物質を分析して見れば、結局宇宙の大勢力の上に其形を現するに過ぎざることが分ります、其事は只今委しく述べ兼ぬるから、別に拙著破唯物論を見るが宜い、其說によれば宇宙の大勢力が活動して此天地万物を開發する樣になりたることが知れます、此の如く考へ來らば、肉躰の死活によりて精神に生滅あ

るべき理なく、精神の本躰たる勢力と共に不生不滅なることは疑ひありませぬ、縱令其樣に大仕掛にして考へざるも、今日已に勢力恒存の格言ある以上は、精神も勢力の一種なれば、是れ亦不滅と云て差支ありますまい、

然し拙者が斯く申すときは、忽ち反對論を引き起すに相違ない、抑精神は勢力の一種に過ぎざれば、勢力全躰に於て不滅なるも、其一部分たる精神に於ては生滅する道理である、例へは宇宙の進化上勢力分化して、或る程度より意識思想を開顯するに至れば、之を指して精神と申すものなれば、其思想にして作用を止むるときは、即ち精神の滅したる時であると云ふ難問が起りて來ます、然し其難

問は少しも恐るゝに足りませぬ、元來外觀上目に觸るるときは精神の實在を許し、觸れざるに至れば消滅したるものと判斷するは、極めて淺薄なる皮相の見解でありまず、世間にて人間は木の支から不意に出て來たとか、地から突然湧き出たとか申す話があるが、五六歲の小兒は之を聞て尤もとして信ずれども、少々物事の道理が分る樣になれば、中々承知致しませぬ、若し精神は人の生きて居る間だけ存在して、死したるときは目に觸れぬから滅したに相違ないと申さば、五六歲の小兒相手の話に類する樣に考へます、已に宇宙の勢力中に精神を開發すべき作用を有する以上は、已に開發し終りたる後も、猶ほ其內部

に精神の原力を有するに相違ない、今物理學の用語を假りて申さば、勢力に潛力顯力の二力ありて、外部に開顯せるものを顯力と云ひ、内部に潛在せる時を潛力と云ひますが、人の生時は精神の顯力となりたる場合にして、其死時は潛力に歸したる場合でありませう、斯く解釋するにあらざれば、勢力恒存の理法の立たざるは勿論、有を轉して無となすべからざる原則に背くことゝなります、故に拙者は生活も精神も共に勢力の一種と云へる説には敢て反對するにあらざれども、勢力一たび分化して生活なり精神なりを開發する以上は、其開發なきときに於ても、矢張り之を潛力として其胎内に包有することを信するものであります、若し此理を推して考ふれば、我々の精神は太古宇宙の初て活動したりし時、已に其胎内に潛在し、又他日我々の死滅に歸し、世界の破壞する後にも其胎内に潛在し、無始の始より無終の終まで、無限の時間を經て決して滅せざることが分り、佛教の所謂久遠劫來盡未來際まで不生不滅なることが知れます、實に愉快も愉快も此位の愉快は、空間を極め時間を盡して決して無からうと考へます、

第十三回　世界は活物靈躰なる事

前述の道理が唯物論者に分り兼ぬるのは、彼は平素世界を以て死物即ち無生的物質の一塊と信ずるからである、

依て宇宙の活物たり靈躰たる所以を説き示すことが肝要ならんと考へます、偖て唯物論者も此宇宙が進化して此世界を現じたることは定めて疑ひますまい、然るに進化は他より「ゴット」の如き怪物が來りて促したるではなく、宇宙自ら其躰より固有せる大勢力によりて活動したるものである、換言すれは自活自動の開發であることも必ず承知でありませう、果して然らは之を活物と名けずして何んと稱するであらうか、死物たる點は何れにあるか、目や鼻や耳がある計りが活物靈躰ではない、苟も己れに活動の力を具して、自ら開發することを得る以上は、皆活物たるに相違ない、若し手近く例を取りて示さば、人間動物は活物である、此活物は「ゴッド」が造出したとせざる以上は必ず宇宙自體より産生したとせねばなりますまい、即ち宇宙自躰は我々活物の親である、子が人間ならば親も人間、子が猿ならば親も猿であると同樣に、子が活物なれば親も活物なることは、是れ亦決して疑はれぬ道理である、サウして見れば宇宙の活物なることは分りきつたことではありませぬか、已に之を活物として更に考察を下せば、活物中の靈體たることが分ります、人間は之を動物に比すれは靈體と稱して宜い、其靈體を産み出したる親は一層の靈體に相違ない、故に宇宙は靈物中の最上完美の體と申さねはなりませぬ、且つ我々は天地万物を望

むに、自然に靈妙の光景に接し、絶美の感想を起すは、宇宙其物の靈妙絶美と申すものでありませう、又我々の精神の内を顧るも、矢張り爽快絶妙の理想を蓄ふることが分ります、是れ亦宇宙其物の眞相たるに相違ない、斯く内外より深く觀察するときは、宇宙は最大の活物たるのみならず、絶妙の靈體たることは明かであります、

已に宇宙の活物靈體たるを知れば、其自體に最大至高の精神を具することは勿論なれば、我々が有する精神は全く其一部分一分子なることは亦疑れませぬ、之を我々の親として考ふるも、我々の精神は其一部分を賦與せられたるものと考へなはなりませぬ、此點に就ては我を推して彼を知り、彼を推して我を知ることが出來ます、果して然らば我々の目前に接觸する所の天地の美觀は、此大精神の光氣なりと解するも差支ありますまい、而して我精神も其大精神の分子なれば、天地の美觀は精神と精神との對合照應なりと心得て宜い、左すれば妍々たる花容も囀々たる鶯聲も皆宇宙の大精神の照應にして、佛書に所謂古松談般若、幽鳥弄眞如とあるも、溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身とあるも、青々翠竹盡是眞如、鬱々黄華無非般若とあるも、皆此理を詠したるものなることか分りませう、此くの如く宇宙を觀察し來らは、人生五十年の歳月は觀天樂地の間に雀躍抃舞して送ることを得、貧苦も病患

も共に相忘れて、坐なから極樂界中の人となることを得るに相違ない、此樂と此味とは世界を死物視する唯物連中には決して分る筈はありますまい、同しく人間ゴ生れて兩眼を具しながら、此美觀を視ることの出來ない輩は、之を評して明き盲人と申さねばなりませぬ、ナント氣の毒千萬ではありますまいか、（情ニ公ニ向キ者ハ不存ゾマセヲカ）

第十四回　精神海上に物質を現ずる事

宇宙其物は常に大精神を具し、斷へず活動開發して靈妙の光氣を我々に與ふることを知らば、其一部分たる我々の精神は假りに生滅ありとするも、精神其物の本躰ゴ至りては、決して生滅なきことは明瞭であると考へます、サウして見れは我々の死は宇宙の大精神より分派したる小精神が其本家本元へ歸りたる道理ゴて、所謂故郷ゴ還歸したると同樣なれば、滅亡しさ處ではなく、大々的精神となりて永く活動を繼續するに相違ないから、精神の不滅は言ふまでもありませぬ、

拙者は數年前より段々此理を研究して、宇宙には本來一大勢力の永存せるありて、世界万物は其活動より生ずる現象なることを發見致しました、而して其大勢力は本來精神的意識性のものなれども、活動の影響として勢力の海面に無類の波を湧かし、其波の固着したるものが物質となりたるものと考へます、之を譬ふるに本來透明なる

清水の表面に氷を結びて不透明になりたるが如く、本來意識性の勢力の海面に物質性の氷を結ひて無意識になりたりと見て宜い、或は透明性の海面に泡を湧かして不透明にありたりと譬へても宜い、然し譬喩計りならべた處で、其道理を述べざれば承知する人もあるまいけれども、其論は實に古今の大議論なれど、到底一朝一夕の辯明のよく盡くす所ではない、依て其事は拙著破唯物論及近日別に著述する一二の書に讓りませう、斯く讓て計り居ては唯物連中の揚足取は必ず逃口上の樣に評する恐あれば、今此に一言だけ述ふることに致します、

西洋に唯物論に反對して唯心論がありまず、此唯心派の說によれば其中に多少の異同あるに拘らず、世界万物は皆我々の精神の鏡面に現する影像にして、心外に一物なく、万物唯是れ一心なりと申します、此理を證明するに或は之を感覺の上に歸し、或は之を思想の中に納め、或は時間空間の方に奪ひ來る等、是れ又一樣ではありませぬ、之れに反して唯物論の方に宇宙進化論を唱ふるものがありますから、拙者は以上の兩說を結ひ付けて更に一考したれば、精神的勢力の活動開發の道理のみ獨り眞理なることを發見するに至りました、古來西洋にて唯物論と唯心論とは互に東西の兩關の如く相爭ひ來れるも、之を一統することに意を注くもの至て少ない、夫故に兩者各一

方に偏するの弊を免れませぬ、然るに拙者は元來唯心論者にして、唯物派は毒蛇惡龍の如く嫌ふ方なれども、宇宙觀世界觀に至ては唯心論の骨格は唯物論の皮肉を付けて組み立てました、夫故に如何に强情の唯物連中も唯一概にカブリ計り振る譯には參りますまい、

斯くして宇宙の上に大觀を放ちて靜思默念すれば、我々人類は上王公貴人より下乞丐賤民に至るまで、廣大無邊なる宇宙の一隅に出沒し、或は浮ひ或は沈み、無始の昔より無終の末まで轉變窮りなきは、全く宇宙本來の大勢力活動の然らしむる所なるを知り、之れと同時に我々の一生は決して五十年乃至百年の短歲月ではなく、久遠劫より未來際を盡して永存することを知り、且つ其死するは眞の死にあらずして、却て永世不死の門に入ることを知り、始めて我迷情中に安心の光明を認むることを得るは、人々皆同感ならんと信ず、其當時の心情は恰も暗夜に燈光を認め、地獄にて佛に逢ひたる時の嬉さと決して異りますまい、一たび斯る安心の光明を認めたる上は、我々の精神上に一大活氣を開發し、百難の前路に横はることあるも、百苦の身上に集まることあるも、能く之を推し排きて古今の大業を成就するに至るに相違ない、蓋し人世にありて眞の勇氣は、此安心の光明中より發することを忘れてはなりませぬ、

第十五回　唯心説の妙旨を玩味する事

斯く段々論じ來れば來るほど、宇宙の靈妙不可思議なることが分りて、實に老を忘れ貧を忘れ苦を忘れ病を忘れ死を忘るゝ程に愉快であります、拙者の聞く所にては、人間一生中最上の愉快は婚禮の時なりと申すも、此愉快は婚禮に千倍万倍する大愉快であります、然るに唯物論者の如く世界を死物視する盲目連中には、到底此愉快の万分一も分る筈はありませぬ、拙者は年來東西兩洋の哲學及宗教を研究して今日に至るものなるが、よく明かに此興味を説きて我々に示したるものは、決して佛教の外に存せざることを保證致します、而して佛教が此興味を我々に與ふることを得たるは、全く其教理の唯心的なるに由ることは明かであります、夫に就ては通俗には稍了解し難き恐れあれとも、此に佛教の唯心に關する二三の語を抜萃して示しますから、成るべく再三再四繰り返して讀み去り讀み來り、以て其妙旨を玩味せられんことを望みます、

輔教編に曰く、心や大なるかな至れり、幽は鬼神に過ぐ、明は日月に過ぐ、博大は天地を包み、精微は隣虚を貫く、幽にして幽ならず、故に至幽なり、明にして明ならず、故に至明なり、大にして大ならず、故に絶大なり、微にして微ならず、故に至微なり、日よりも精に、月よりも精に、鬼

よりも靈よ、神よりも靈にして、而して天地三才よりも妙なり、

興禪護國論に曰く、大なる哉心や、天の高き極むべからず、而して心は天の上に出づ、地の厚き測るべからず、而して心は地の下に出づ、日月の光は踰ゆべからず、而して心は日月光明の表に出づ、大千沙界は窮むべからず、而して心は大千沙界の外に出づ、其れ大虛か、其れ元氣か、心は則ち大虛を包て、而して元氣を孕むものなり、天地我を待ちて覆載し、日月我を待て運行す、四時我を待て變化す、萬物我を待て發生す、大なる哉心や、吾已むを得ずして強て之に名けて、是を最上乘と名く、亦第一義と名く、亦般若實相と名く、亦一眞法界と名く、亦無上菩提と名く、亦楞嚴三昧と名く、亦正法眼藏と名く、亦涅槃妙心と名く、

此所謂一心の躰は即ち眞如と稱し、世界萬物の本躰であると申します、故に六齋精進經記の序文に述ふる所は左の通りであります、

心源に心あり、其名を眞如と云ふ、不思議を躰となす、是れ緣すれは則ち慮亡し、議すれは則ち言喪す、寥たり廓たり、冲漠希夷たり、窈たり冥たり、妙明離微たり、懸に迷悟凡聖の際を出て、生死涅槃の域を超ゆ、際を出るを以ての故に、能く迷悟に入り、能く凡聖に入る、域を超ゆ

るを以ての故に、能く生死に墮し、能く涅槃に墮す、迷悟凡聖此よりして起り、生死涅槃故なくして分る云云、

此くの如く我人の有する一心は奇々妙々にして、其中より一切の世間を現出する故に、華嚴經と申す經文の中に、左の通り說きてあります、

心は工なる畫師の如く、種々の五陰を造る、一切世界中法として造らざるはなし、

又羽翼原人論の序に、眞如一心の本性廣大にして、應用自在なることを形容して申すには、

其道は無始無終、常恒不變にして、能く萬象の主となり、眞まして寂、靈々照々、幽邃玄通、應用自在なり、天地風雲、

山川國土、水火人物、草木瓦礫より色聲香味觸法の微に至るまで、皆遮那法性の胸中より流出現顯せざるはなし、

とあります、其他之に類する一心の作用に就ての說明は、一々拔萃して示すことは出來ませぬ、又今引證したる文句中には、通俗に解し難き處あるべきも、拙者の目的は佛書を講義するのでなければ、ドウゾ各宗の和尙サン方より質問なさゝる樣に願ひます、又此唯心の道理を證明したるものは、西洋の哲學書中に最も多く見る所なれども、此に一々說き盡すこと難ければ、直に西洋哲學に就て讀まんことを望みます、

第十六回　因果の規則によりて靈魂不滅を知る事

以上物質不滅及勢力恒存の理法に從て靈魂不滅を論じたれば、是より因果相續の理法を考へて其不滅なる所以を説かねばなりませぬ、抑天地萬物の變化は一として因果の規則に依らざるはない、一片の雲の動くも一滴の水の落つるも、皆因果の然らしむる所であります、若し之を推して太古に泝らば、今日、今時の千變萬化の原因は幾億万年の昔にありて存することが分ります、何せなれば今日の原因は昨日にあり、昨日の原因は一昨日にあり、今年の原因は昨年にあり、昨年の原因は一昨年にありとして、五年十年百年千年と次第次第に古代に泝らば、天地未開の時に既に今日の原因の定まり居る道理であります、斯る太古より因果相續して今日に至り、其間一髪だも容れざることが分つたなら、我々の一生は今日今時に出來たるにあらずして、世界開闢の當時にありて存することも分りませう、之れと同時に我々の精神も今日今時に生じたるにあらずして、世界開闢の昔に存することが分ります、斯くして無始以來不斷相續して今日に至れるを知らば、之を將來に考ふるも世界の終りまで不斷相續するを分ります、故に我々が今死するも決して其時に靈魂の滅する筈なく、永く相續して盡未來際に及ぶ道理であり

ます、サウして見れは因果相續の理法に考ふるも、靈魂不滅なることはナント明瞭ではありませぬか、

此に又唯物論者は必す拙者の所見を駁して、因果の規則は物質上に存するも、精神上に應用すべからすと申すも相違ない、拙者は之に答へて是れケシからぬ詰問である、唯物論者は一元論か二元論か、若し二元論ならば物ヨは物の規則あり、心には心の規則ある筈なれば、物の規則を以て心を論するは不都合なるも、唯物論は元來一元論であるとなれは、斯る問を起すは最も不都合と申さねばなりませぬ、且つ之を實際に考ふるに、我々の精神作用は內外の感覺思想が原因となりて種々の變化を起し、一念一思と雖も決して偶然に生ずることなく、皆因果相續の道理によるは、物質の變化と別に變るおとはない、唯物質は表面ゐ於て其規則に從ひ、精神は裏面に於て其規則に從ふたけの相違であります、斯く申すと又必す唯物論者は疑を起して、唯心論の方では物質は因果の規則に從ふも、精神は其規則の外に立ちて自由である、即ち意志は自由なりと云ふではないかと難じませう、之ヨ對して唯心論者中には多少意見の不同あれとも、拙者の執る所は意志の自由とは表面乃物質に對して比較上の自由にして、意志其者は全く因果の規則の獨立する譯ではない、唯之を物質の不自由に比すれは、多少の自由を有するのみであ

ります、然し此問題は心理學の上に考へ、一々精神作用を分析して説明せざるを得ず、且つ直接に靈魂不滅に關係なきことなれば、其説明は他日に讓ることに致しませう、』

斯くして精神其者が因果の規則に從て變化する以上は、因果其者が不斷相續すると同時に、精神其者も不斷相續する道理である、換言すれば精神は不滅であると云ふことになります、若し又拙者の所謂大勢力活動説に考ふるも、因果は其活動の規則なれば、勢力恒存と共に因果の規則は無窮に相續し、從て精神をして不滅ならしむる譯であります、

第十七回　死後精神の復活ある事

若し純然たる唯心論の觀察によれば、此世界の日月星辰より山川草木に至るまで、一切の事物は皆一心の所現となり、時間も空間も一心より投げ出したるものとなるから、靈魂の上に滅不滅を論するまでもなく、一口に精神其者は絶對的に不滅なりと云はねばならぬ、然れども今一歩を讓りて我々生存上内には精神あり、外には物質あり、又我一身は肉躰と精神との二者より成り、我々の壽命は五十年乃至百年と定めて、普通の觀察の上に考ふるときは、我精神作用は死時全く止みて、無感覺無意識となることは、種々の實驗に照して明かである、縱令他日復活するものと想像するも、本來不滅なる精神が其作用を失ふは

如何、且つ其場合には精神は如何様なる狀態を有し、又何れの日に復活するものなるや等の疑問は必す起るに相違ない、而して此問ふ答ふるには是非因果の規則に依らねばなりませぬ、然し其前に古來の靈魂説の立ち難きことに就て一言致しませう、

古來の靈魂説は此肉躰の外に別に一團の精神ありて、自在に出入の出來る樣に考へ、其精神が肉躰中に入れば生活を現し、肉躰を去れは死滅に歸すと唱へたるも、今日の實驗ふては其樣に靈魂と肉體と全く相離れて自由ふ出入することの出來難きを知りたれば、靈魂説も自然に一變するに至りました、拙者を始めとし其他の靈魂不滅説を唱ふるものは、大抵靈魂は肉躰と全く相離れたるものにあらずして、寧ろ肉躰に連結して其裏面に存するものと考へます、其裏面の精神が物質の集合より成れる肉體の上に作用を現する間を生時と名け、退きて裏面に潜むときを死と云ふことになります、此點まで論定するには長い説明を要すれは、是れ又破唯物論及其他の著書に讓り、唯此ふ精神が物質の裏面に潜むときには、意識を失うて無知覺となるか、若し無知覺となるならば、如何して再ひ知覺を生することになるかを説明せねばなりませぬ、」

拙者の考にては精神が死して一たび休むときは、必す、無知覺無意識になるに相違ない、其然る所以は精神本來の

性は知覺性意識性なるも、此世界は宇宙の大勢力の表面に無意識的物質の波を湧かし、其波の餘勢を精神上に及ぼし、精神自躰の意識性をして明暗相繼き、斷續相交はる樣に至らしめたるものと考へます、是れ全く因果の規則に伴うて習慣性の存する故であります、習慣性とは物理上の所謂惰性と其意を同うし、一度精神が世界活動の爲に波動を起せば、永く其勢を保たんとする傾向あることを申します、是に於て人の死時精神一たび知覺を失ふに相違ない、然しながら一時の後に精神固有の意識性を再起することあるは、因果及習慣の道理によりて分ります、而して其說明も破唯物論に讓ることに致しませう、若し破唯物論に證明せるが如く、人の精神は肉躰の造構より生ずるにあらずして、精神の自躰に本來固有せる種々の原因と習慣とが物質の上に働きて肉躰の造構が出來る即ち我々の身躰は精神の作用によりて出來ると云ふことになります、更に換言すれば精神が原因にして、身躰は結果なりと云ふことに歸します、此說に依れば我々が一生の間身口意の上に爲したる一言一思一行が原因となりて、其死するときに精神中に遺傳して其惰力即ち影響を傳へ、他日に至り精神再ひ物質の上に作用を起して、其原因に適當せる身躰を構造し、以て再ひ精神の意識性を開顯するに至る道理であります、此理は唯物の眼鏡を外

して眺めなければ決して分る筈はありませぬ、

第十八回　死は猶ほ大眠の如き事

以上の道理は餘り込み入りて分りにくいから、一口に説明することは兎ても出來る譯でなけれども、今少々述べて置きませう、一躰唯物論の見解にては、物質ありて後勢力あり、肉躰ありて後精神ありの説なれども、段々世界の本源に泝りて考ふるときは、勢力ありて後物質あり、精神ありて後肉躰あることになります、其證據は物質其物を分析して見れば、結局一種の勢力となり、之に古來の唯心論を當篏めて考ふれば、忽ち精神的大勢力より天地万物一切の物質の現出せることが分ります、既に前にも述べたる通り、拙者の主論は全く此點に本きて宇宙勢力論を唱へて居ます、然し此點は唯心論をよく研究せなければ決して分る筈はありませぬ、唯憂ふる所は唯物論者が唯心論と聞けば天窓から空想と見做して、振返りて見ることをせない、諺に所謂食べず嫌と云ふ始末であります、唯心論が空想なら、唯物論は十倍も百倍も增して居る空想である、即ち空想に空想の上塗をしたる空想である、何ぜなれば唯物論の本據たる物質は、唯心論の本據たる精神其者によりて認められたるものではありませぬか、斯く雙方で空想空想と計り云ひ張りて睨み合して居ても、猫の喧嘩の樣で際限もないことであれば、其一段は拙著破唯物

論其他の著書に譲ることに致しませう、兎に角宇宙間に精神的一大勢力ありて、其躰内に無始以來の種々雑多の原因事情を納め、其結果よりて此世界も我々も皆其形を結ふ樣にありたることを承知してもらいたい、之を佛教よりては前世の宿因業報業感等と申し、之を進化論にては遺傳と申します、斯くして我々が此世に生れ來りて他日復た老い去るも、矢張り我が勝手にて然るにあらず、生れし以前永い間の原因の引續なるに相違ないと同時に、我々一代の間に爲したる一切の言行が、善にあれ惡にあれ亦皆其原因を助けて、死後再ひ身を結び生を現する樣になり、未來無限の時間の間には、幾回となく生々滅々する道理であります、此道理は拙者が勝手に申すのではなく、勢力恒存因果相續の理法が拙者に教へて此く言はしむることとなれば、若し其說を不都合と思ふ御方は、此理法に就てよく尋ねて見るが宜い、此理法は無我無欲であるから、別に入門料や束脩の心配は入りませぬ、拙者も幸に其理法の指導によりて、人間の死は眞の死にあらずして、一時の眠息なることを知ると同時に、他日再ひ醒覺する時あることが分り、始めて數十年來且つ迷ひ且つ苦み居たる胸中が、一時に廓然として開け、萬里雲晴れて月正に中するが如き心地する樣になりました、サウして見ると睡眠に大小の二種ありて、毎夜の睡眠は小眠にして、

六時間か八時間の間の事なれども、死するときの睡眠は大眠にして、如何に長き年月を經て醒覺するかは我々の想像の及はざる所なれば、唯我々は勢力と因果との理法の我を欺かざるを信ずて、他日必す再起する時あることを疑いませぬ、

唯物論者は人の死するときに一たび精神作用を失ひたる以上は、再ひ精神作用を起す道理は決してあるべからさる樣に考へますが、是は全く有形の物質を見る眼ありて、無形の精神を觀る眼を有せざるに由ると評するより外はありませぬ、而して人の精神の不生不滅なることは、物質の不生不滅なると同樣なれは、外見上に精神の一生

一滅を見るは、物質上に生滅の變化を見ると同樣に心得て宜い、例へは水の聚りて地上にあるは人の生時の精神に比し、其蒸發して空中に散ずるは死後の精神に比し一たひ散したるものが再ひ結ひて雨露となりて元の如く地上に聚まるは、精神の再生に比して考ふれは、定めて幾分の了解は出來るでありませう、

第十九回　精神の力よく肉躰の組織を造り出す事

兎角世間の人は其見る所餘り狹きを以て、精神の眞相が分りませぬ、唯物論者も耶蘇教家が世界の開闢を僅々六千年前と認めたるを見て、之を打ち破りたる手際は稱す

べきも、猶は宇宙の開發に就て時間と空間との無限なるが如く、世界の無限にして、世界の進化退化の共に無限なることが分らぬから、精神不滅の理が呑み込めませぬ、夫故に人の死したるときは火の滅したると同樣であるのに、死後靈魂猶は存すと云ふが如きは、火の滅したる後尙は火存すと云ふ樣なるものにて、狂人の寐言に近いなどゝ評します、拙者は敢て此の如き淺見者を相手として飽まで爭ふ積りにあらざれば、且く其言に從ひ、人の死すると火の滅するとは同樣なりとするも、火の一たひ生するには必す之をして生せしむる原因があるに相違ない、亦其滅するも滅せしむる原因がありませう、既に原因によりて生滅する以上は、他日之れと同樣の原因に會すれば、復た同樣の火の再現する道理であります、之と同しく人の死も他日之をして復活せしむる原因に會すれば、再起する道理ではありませぬか、又唯物論者は肉躰の造搆組織か其宜きを得たる場合に精神の作用を現し、其組織は多少の損所を生したる場合に精神作用を失ふ譯である、然るに死後精神再ひ生するとなすときは、同一の造搆組織の再ひ生する譯なるも、此の如き場合決してあるべからず等と申します、左れども第一は將來無限の時間の間に、無限の世界は於て無限の變化ある以上は、同一の造搆組織を組み立つる機會は決してあるとは斷言は出來ませ

ぬ、唯物論者よく此無限と云ふことゝ氣を附けゝ考ふるが宜い、之を自然の作用ゝ任しても同一の造搆組織を生する機會あるべきに、若し精神が物質の上に働きて肉躰を組織するものと考ふるときは、死後幾回も同一の造搆を組み立てゝ精神の再現あるべき道理でありまず、縱令精神は死後無意識の境遇ゝ入るも、其中に再ひ現出せんとする原因習慣を存するを以て、其力が無意識中ゝ働きて、意識再現の機會を生ずる樣ゝなりまず、恰も蜘蛛が巣を作り、蟻が塔を造ると同しく、雨風や人力を以て之を取拂ふても蜘蛛蟻は已れの無意識的作用によりて再ひ造出するゝ比して見れば、幾分か分りませう、或は又庭の草に譬へても宜い、庭掃除の時に草を刈りても、其根まで悉皆取り掃はぬ間は、幾邊となく生ひ繁りて元の草となりまず、縱令冬分になりて霜雪の爲に枯死しても、苟も其根の殘れる間は翌年ゝなりて再ひ生するに相違ない、是れは其根に持てる無意識的生力か物質の上に働き、四圍の物質的分子元素を其躰ゝ取り集めて、元通りの草の形を結ふに至るからでありまず、斯くして人の精神が無意識より起りて肉躰を組織せるに至りし以上は、再ひ内外の事情によりて死滅に歸するは、恰も草が霜雪の爲に枯死したると同樣でありまず、故に他日再ひ物質の上に働きて再現する時があることは疑れませぬ、斯く申したなら

ば唯物論者は人の死するときは精神の根まて皆朽ち去るものなれば、復活の見込なしと云ひませうが、精神の根は宇宙の大勢力の中に存することなれば、決して死滅は歸せしむることの出來る道理は萬々ありませぬ、是等の點をよく〳〵考へ來らば、靈魂不滅は勿論、佛教の所謂三界流轉六道輪廻ですらも、幾分か分る樣になりませう、

第二十回　精神的原因によりて生死輪廻する事

偖て靈魂不滅論を段々進て此に至れば、佛教の三界流轉六道輪廻說をも辯明せねばならぬことはありました、唯物論者は言ふ迄もなく、佛教家の一部の人は自ら此輪廻說を疑ひ、世間に對して喋々することを憚るものがありますが、因果說を推し立てゝ行けば、必す輪廻を說かねばなりませぬ、唯學理上より之を說くと從來民間にて唱へ來れるものとは、大躰は變らざるも、細い點は至りて幾分か相違する所が出來ます、

佛教は唯物論の正反對たる唯心論でありて、物質世界は精神界上は顯はれたる現象にして、精神の外に別は物質の實躰はなしと立てます、而して其精神上に物質世界を現する所以は、精神躰內に遺傳して來れる過去の業因より起ると申します、即ち此精神が未た此世界を現せざる過去世に於て、已れは爲したる身口意の諸業が原因となり、次第に相續して今世に至り、其結果を現したるものと

致します、第一に我々が此人間界に生れて來りしも、貴賤貧富の別あるも、生老病死の無常なるも、皆此業因業感の然らしむる所と說き、我々が人間となりて此世にあるは、各人間となるべき原因を修めたる故であり、銘々の境遇運不運の同しからざるは、人間に生るべき原因を修めたる中、多少異なる所を有する故であると申します、一寸聞いた所では不都合の說に感せらるゝも、篤と考へて見れば其說の大は道理あることが分ります、然し此理は唯心的觀察を以て此世界は精神海面の表象なることを會得せざれば、了解し難いに相違ない、若し此世界を唯心の世界とし、精神中に包有する原因は從て我々の境遇の起ることを知らば、我々の死するときは、我一生中の言行と前世の業因とが相合して其精神中に熏傳し、他日精神再起の曉は其結果を開き、或は人間界或は天上界等に更に一生を現することが分りませう、是れ即ち六道輪廻說であります、若し六道の狀態等に付是まて細說せるものゝ如きは、學理の關せざる所にして、想像上其理を補ひたるものと考ふるより辯明の致し方はありませぬ、唯學理上よりて講究し得る點は、精神的因果の規則によりて、一度死したる精神が再生復活する以上は、原因の異なるに應して結果亦異なるべき道理なれば、次に現する世界は是までの世界と異なるは勿論、銘々同一の世界に出つることと難く、

再三再四生々滅々して、所謂三界六道乃至無數の世界の間を轉生輪廻する事であります、此道理は研究すれば研究する程面白く感せられ、佛教を研究する興味は恐くは此點にあらんかと考へます、

更に此輪廻説を根本から説き起せば、元來佛教は唯心一元論に本きて、眞如一元説を立つるものであります、而して眞如とは世界萬有の本源實躰に與へたる名目である、其眞如の大海に波を生じたるが此事々物々千差万別の世界である、其世界は生々滅々變々化々して止まざるを以て之を生滅界と申します、依て眞如の躰は水の靜かなるが如く、生滅の世界は波の起伏して一樣ならざるが如く、其波一たひ鎭れば本來の眞如に歸する筈なれども、因果及習慣の規則に從ひ、一度生じたる波動は永く繼續せんとする性ある上に、我々が更に之に動勢を加へ、遂に生滅界に永く浮沈せざるを得ざる樣になり、三界六道の間に窮りなく流轉するに至ると説くのが、佛教の輪廻説であります、固より佛教の目的は生滅界を脱して眞如界に入るにあれども、若し一飛に此に達することを能はずとすれば、永く三界六道の間に出沒して無數の山河を跋渉し、無數の風月を眺望するも、亦一興ではありますまいか、尤も人間界より段々下界に沈淪するは迷惑なれども、上界に昇進することは、日本見物や西洋見物よりも遙に勝り

て面白のらうかと察します、斯く申すと佛教の本旨には背くけれども、若し愈上界に昇進することが明かに分るなら、極樂へ參る前にせめて二三界を見物して見たいことはありませぬか、

第廿一回　因果に善惡の別を生ずる事

輪廻說に關係して善惡因果と地獄極樂との佛說も一應辯明して置かねばなるまいと考へます、佛教にては善因善果惡因惡果と申して、因果の規則に善惡を配當して說きますが、此點は唯物派連中の大に攻擊する所であります、然し佛教の立方を根本から了解すれば、よく分る筈である、其立方は眞如の理法を世界の本源實躰と定め、其海面に波を起して、益眞如の本性は遠かる樣に傾きて行く方の原因を惡とし、之れと反對の方向を取りて本來の眞如に還らんとする方の原因を善とします、要するに佛教の善惡は眞如に向ふと背くとによりて別れます、斯くして眞如に遠かる方の原因を修れば、益之に遠かる結果を來し、近つく方の原因を修れば、益之に近つく結果を來す事を名けて、善因善果惡因惡果と申します、而して眞如の反對即ち生滅界に向ふ方の因果を迷の因果とし、生滅界を離れて眞如界に達する方の因果を悟の因果と致します、今之を進化論に比すれば、宇宙の目的は進化にありとするも、內外種々の事情關係によりて進化の原因を生す

ることもあり、又退化の原因を起すこともありませう、而して進化の原因は進化の結果を來し、退化の原因は退化の結果を來すに相違ない、若し其進化の因果を善とし、退化の因果を悪とすれば、進化論も矢張り善因善果悪因悪果の規則を用ふることとなります、此樣に考へて見たならば、毫も佛教の善悪因果を怪むには及びませぬ、

斯くして善悪因果を立つる以上は、善果の最上と悪果の至極との兩端があるべき筈なれば、其善果の方を極樂とし、悪果の方を地獄とおたるものなるが、是れ元より當然の事と考へます、苟も眞如界と生滅界とを論する以上は、善悪因果を說かねはならず、善悪因果を說く以上は、地獄極樂を立てねはならぬことも、自然の道理の敎ゆる所にして、決して不合理非論理たる譯ではありますまい、唯地獄の鬼や釜の話、極樂の蓮華や音樂の話は道理以外の事にして、若し宗敎外より之を視れは、苦樂の狀態を形容したるに過ぎざることにあります、換言すれは是れ信仰上の問題にして、道理上の問題ではありませぬ、

以上述ふる所之を一括して示さば、佛敎にては最初眞如の世界より生滅の波を湧のして、眞如界と生滅界との別を生するに至り、表面に生滅界を顯して、裏面に眞如界を開きたるゲ今日乃世界であります、然るに我々は生滅界にありて生滅の波間に浮きつ沈みつして、三界六道の間に

迷ひつゝあるものなれば、今より此生滅界を離れんと欲すれば、善因善果の規則に本づき、之を遠離せんとする志を起し、種々の善因を修めて眞如界に向ふことを勉めねばなりませぬ、然るに我々は無始以來生滅界の迷子となりて此にあるものなれば、所謂遺傳習慣の性力によりて、直に眞如界に飛ひ込むことが出來ぬから、止むを得ず漸々徐々と生を重ね死を繰り返して、一段つゝ上界に昇進し、最後に裏面の眞如界に達する樣になります、之を成佛と名けて、迷界を離れて悟界に入りたる場合であります、若し之に反し生滅界に執着する情禁し難くして、我慢を募り妄念を恣まゝにするときは、惡因惡果の規則によりて、漸々徐々下界に沈淪し、結局地獄に墮在すと申します、是れ皆善惡因果の規則に本づきたるものなれば、別に怪むに足らざる樣に考へます、

第廿二回　人間は空想を免れ難き事

靈魂不滅論と佛敎の輪廻說因果說とは餘程密切の關係ある樣に感じたるを以て、佛敎の立方も一通り申し述べましたが、然るに唯物論者は必ず此說明を聞きて、一應の道理あるに似たれとも、更に實驗に徵することなく、事實に訴ふることなく、已れの心の中から無理に練り出したる樣に見えて一々皆空想妄斷の如くに考へらるゝと申しませう、縱令其事たる實驗に照すこと能はざるも、苟も道

理ある以上は之を妄斷とするが如きは決して受取ることは出來ませぬ、若し之を評して空想と云ふならば、空想には色々意味の取り方があるから、或る意味に於ては差支ありますまい、抑實驗は我々の感覺に本づくものなれば、其力の及ふ區域は至て狹きものにして、宇宙の廣大なる時間空間の無限かる、到底實驗の究め盡くす所ではありませぬ、依て靈魂不滅問題の如きは固より實驗の及はざる所なれば、唯道理を以て推測するより致し方はなからうと考へます、故に若し實驗の及ばぬ所は皆之を空想と云ふならば、靈魂不滅問題は勿論空想でありますが、而して空想中に道理あるものと道理なきものと二樣あるが拙者が靈魂に付て論じたる所は道理ある空想なれば、之を理想と名けます、之に反して道理なき方を妄想と云ひます、

若し唯物論者が道理の有无に拘らず、すべて空想を排するならば、唯物論其者も空想を免れぬから、第一に之を排し、人間の毎日毎夜思ふことと信ずること皆空想なれば、すべて之を排せねばならぬことになります、拙者の觀る所にては、人間は空想的動物にして、空想の空氣中に生活して居ると考へます、先づ少年の時に在りては、生涯の事業に付非常の空想を懷き、日本は愚か世界中に名を轟かし得る樣に考へ、人生五十の壽命か過ぐれば、尙ほ其上に百

年も百五十年も活きらるゝ樣に思ひ、偶病氣にかゝりて全治覺束なき樣になりても、全快を空想して安心し、家貧なれは富を空想し、身賤しければ貴を空想し、百姓は豐作を空想し、商人は景氣を空想して滿足する等、皆空想の極、妄想を描きて闇夜に金を拾はんことを願ふと同樣の有樣であります、蓋し唯物論者の如き平素專ら實驗を唱へ、空想を排するものでも、其生存する間は日夜此空想は免れまい、故ゝ拙者は人間萬事空想の世の中と申して居ます、又唯物論者が靈魂滅亡論を唱へて、肉躰を離れて精神はない、死後の世界はない、復活再生は決してないと斷言することも、矢張り空想であります、唯物論者は神か佛でなき限りは、死後の世界の有無が分る筈はない、然るに自ら其有无を實驗せずして斷じて無しと定むるは、空想と云はずして何んと申しませうか、すべて實驗の力の及ばざる所は、之をなしとするも有りとするも皆空想に相違ない、依て唯物論者が唯心論を空想と評することすらも矢張り空想であります、若し空想の點より比較すれば、唯心も唯物も孰れも負けず劣らずの空想と申して宜い、夫れのみならず實驗上の事實も精密ゝ論すれば、是れ又空想の臭味を脱しますまい、例へは從來の經驗によりて明朝六時に大陽は必ず東天に再現すると定めても、其一夜の中に天躰上ゝ不時の變動あらはれて、明朝六時に日出

を見ることとなるかも期し難いとすれば、是れも空想となります、又目を開きて紙を見て白いと判斷するも、視覺の不完より斯る色を現するであらうと思へば、其判斷も亦空想となります、故に唯一概に空想はイケナイとして排斥することは出來ませぬ、

第廿三回　世界の道理は人智を以て窮め盡くし難き事

世俗は勿論、學問上にも空想を要する所以は、世界の事物一々人智を以て知り盡くすこと能はざるを見て猶は一層よく分りませう、今之を證明する爲に世界に可知的と不可知的との二通りあることを申さねばなりませぬ、兎角世間の人は宗教上の問題を盡く道理を以て說き盡さんと思うて居る樣なれども、是は大なる了見違ひにして、元來宗教は不可知的を本とし、學術は可知的を本とするの別あることを知らないに相違ない、然るに往々宗教問題を可知的の方面より論ずることあるも、是れ唯一部分に過ぎませぬ、故に是まで述べたりし靈魂不死の說明は、可知的の半面より解釋したるまでなれば、猶ほ其外に不可知的の一面あることを知らねばなりませぬ、是に於て拙者は宇宙間に不可知的の眞に存する所以を述べませう、

哲學上にて人智は相對且つ有限にして、宇宙は絶對且つ

無限であると申しますが、有限の桝を以て無限の水を量ることと難く、相對の人智を以て絶對の宇宙を知ることは六ケ布い、將來何程人智か進ても、月の世界や星の世界へ旅行することが出來ないと同樣に、宇宙間の事物の道理を盡くすことは出來ませぬ、今日理學の實驗は宇宙の事物の道理を究め盡したる樣に考ふるは、却て素人の想像として、古代に於て分らざりし事は、今日に於ても矢張り分りませぬ、例へば人の精神の本源實躰の一段に至ては、古代の學者にても不可知的、今日の實驗にても不可知的であり、將來も矢張り不可知的であるに相違ない、其故は精神の問題は結局精神を以て精神を知ることになり、

己れの目を以て己れの眼を見んとし、己れの手を以て己れの躰を擧げんとすると同樣なれば、何時までのゝりても決して分らう筈はありませぬ、又宇宙の本躰如何の如きも、古も今も矢張り不可知的と云ふに至りては同じことであります、然のみならず水や空氣の如きですらも、其何物たるやは既に分りたる樣で未た決して分つて居りませぬ、例へは水は水素酸素の二元素より成ると云ふことだけは分つて居れとも、水酸二素は如何と推し詰ると、結局分らぬと云ふことになります、又理學上にて引力重力の說は一般に唱ふる所なれども、其力の由て起る原因に至りてゝ矢張り分りませぬ、又光線の說明に「エーテル」

と名くる一種の精氣の存在を假定するも、其物の如何は今以てよく知れませぬ、斯くの如く段々推し窮めて見ると、此世界の表面の一部分丈が僅に知れて居るのみにて、其他は皆不可知的であります、若し此世界は不可知的なりとして考ふれば、我々の笑ふのも泣くのも皆不可思議にして、鴉のガーガー雀のチューチュー花紅柳綠水碧山青に至るまで、不可思議なることが分り、何を見ても美く見ゆ、何を聞ても面白く感じ、愉快も愉快も大愉快に思はれます、拙者などが茅屋破窓の下に眠りて、貧苦多患の境遇にありながら、毎日々々滿腔の愉快を以て日を送るのは、全く此天地此万物の不可思議なることを悟りて、朝夕其味を心中に感するからであります、世間にて樂を買ふには莫大の金が入るけれども、此拙者の樂だけは一文半錢も入らずして、而も其樂は金で買ひ入れたる樂より百倍も千倍も優りて居ます、殊に先年來自ら妖怪學を研究して、一層此不思議の妙味を感する樣になり、爾來妖怪を神の如く崇め奉りて喜んで居ます、佛敎にては多く此の世の中を苦界惡處の樣に說きますが、拙者の如き此世界を不思議靈妙の境遇と悟り上げたるものには、苦界惡處どころでなく、樂界善處を通り越して極樂至安の國土となりて見えます、若し世に不幸不平の爲に心思を苦むるものあらば、來りて吾門に入り、以て樂天觀を試られては如何、決

して遠慮には及びませぬ、

第廿四回　人の理性に滿足を與ふるの必要なる事

此の如く世界に有限にして可知なる部分と、無限にして不可知なる部分と二通りありて、學術は其可知的部分を本領とし、宗教は其不可知的部分を本據とするの別があります、而して哲學は可知的不可知的の兩方に關係するも、可知的より不可知的に及ぼす方針を取り、宗教は之に反して不可知的より可知的に及ぼす方針を取るの相違があります、然し此二者は共に不可知的に關係するを以て、雙方互に助け合ふことが肝要である、依て佛教の如き

は半面は宗教、半面は哲學より成り、二者兼備の宗教となりて居ます、左れは拙者は此に哲學と宗教と互に提携する必要に就て一言致しませう、

人の性質に感性悟性理性の三通りあることは、或る哲學者の申す所でありますが、拙者も此名目を用ひて先つ其解釋を述ぶれば、感性とは感覺性のことにして、耳目の感する作用を云ひ、悟性とは理解力のことにして、普通の實驗論理によりて事物の道理を了解する作用を云ひ、理性とは前二者の上に位して、到底實驗も人智も遙かに及はざる絶對無限の境遇に躰達超入する作用を云ひます、故に理性は我々の思想中最も高尚深遠なる超理的想像、即

ち理想として、我心と不可知的との關係は全く此性力の上に存するに相違ない、然らざれば我々の心中に無限絶對不可知的等の事が分る筈はありませぬ、依て拙者は此理性を無限的心力と解し、哲學と宗教との二者を結合する心力であると考へます、

今日の實驗及普通の道理は人の悟性に滿足を與ふることが出來ても、理性には滿足を與ふることが出來ませぬ、然るに我々の心中には悟性の外に理性を具へて居るから、如何に理性を抑へて有限可知的の範圍内に止らんとするも、心源最も深き處より湧くが如く衝くか如く刺戟を傳へ來り、到底止まることと能はざれば、實驗以外道理以上より泝りて、絶對無限に躰達せんとする樣になります、故に唯物論者などが靈魂不滅論を指して空想妄斷なりと評するも、靈魂の本源實躰を發見するにあらざれば、盟うて我々の理性に滿足を與ふることが出來ませぬ、若し理性に不滿足を與ふるに至らば、我々は生涯不滿足不愉快を抱き、終に理性上の快樂を知らずして、空く永眠の境に就くのねはならぬ、ナント遺憾の次第ではありませぬか、悟性は有限性なれば其快樂も亦有限なれども、理性は無限性なれば其快樂も亦無限であります、且つ悟性の一部分は動物尚ほ之を有するも、理性に至りては人間特有の性質にして、其快樂は人間獨占の快樂であります、嗚呼同し

く人間に生れて、此獨占の快樂を知らぎして一生を送るは、殘念至極に感せらるゝことはありますまいか、願くは心源最も深き處より理性の靈氣を開發して、其無限の風光、無限の快樂中に一身を處し、世海の狂風激浪の間に立ち、悠然として閑歳月を樂まんことを、是れ拙者計りでなく、貴賤貧富の別を論せず、人間一般の希望ならんと考へます、斯くして拙者は年來古今東西の哲學及宗教を研究したるも、無限絶對の不可知的を開示して、我々に理性上の滿足と快樂とを與ふるものは、佛教の右に出つるものなきを知り、爾來專ら佛教を研究して、日常世事紛々百苦千患の間にありながら、無限の快樂を心頭に浮ぶることを得ぬるは、誠に望外の大幸であります、

第廿五回　理想の力によらざれば靈魂問題を究め難き事

我々の理性より發する想像は之を理想と名けますが、此理想は空想の樣なれども、先きに述べたる如く道理的想像にして、不合理の空想ではありませぬ、唯絶對無限等の問題に對しては、感覺上の經驗は勿論、普通の道理の能く及ぶ所にあらざれば、頗る高尚深遠なる道理、即ち理想に依らねばなりませぬ、故に普通の道理計りを研究して居る人達から見ると、何んとなく不合理の想像の樣に思はるゝ相違ない、恰も漢方醫に就て煎藥計り服したるも

のは、西洋醫の水藥を見て効力の少ない樣に思ふと同樣であります、斯くして神の問題、宇宙の問題、靈魂の問題等は皆此理想に依て研究せねばなりませぬ、

拙者が靈魂不滅論を說くに、到底實驗の及ばざる所なれば、すべて理想の道理より照して證明したるが、唯物論者などの實驗計りを當にして居る連中には、よく會得が出來ぬかも知れませぬ、然し若し之を唯物論者の如く、表面一樣の解釋を下し、死後の靈魂は其作用を現することなければ、滅無に歸したるものとなすも、其說の如きは悟性に滿足を與ふることが出來ても、決して理性に滿足を與ふることは出來ぬ、相違あい、又下等の宗敎の如く不合理の空想、即ち妄想を以て說明しては、矢張理性の滿足は出來ますまい、依て是非此問題は道理的想像、即ち理想に考ふるより外はありませぬ、而して其道理は別に理想其者が勝手に作ります譯ではなく、實驗の範圍內に於て諸學の一致するものを取り、之を實驗以外に當篏める譯であります、例へは物質不滅、勢力恒存、因果相續等の原理の如きは、靈魂不滅論の理想上の說明には缺くべからざるものなれば、拙者は最初より此規則を應用して居ます、其中因果の規則の如きは、物質以內より以外に及ぼし、有ゆる世界の變化を支配するものなれば、靈魂の說は最も効力あると考へます、すべて有形無形共に隱れたるものを

發見して行くには、因果の規則より善きものはない、依て死後の靈魂の如きは全く隱れ且つ潛みたるものなれは、之を發見して行くは因果の規則である、故に之を暗夜の提灯と心得て宜い、其提灯は靈魂の所在計りでなく、世界開闢の前より閉鎖の後まで照すことが出來る、サテモサテモ廣大無邊の提灯ではありませぬか、此提灯によりて照せば、人の死後の靈魂は一時眠息の狀態に入るのみならず、更に復活再起して、何回となく無數の世界に其作用を現じ、生々滅々滅々生々、實に窮りなきことを分ります、是を以て佛敎にて〻生死輪廻の無窮なることを我々に示して、弘法大師は生れ生れて生の始を知らず、死に死んで死の終りを知らぎと申しました、蓋し我々は生死の間に永く輪廻するは目的とする所でなく、早く眞如涅槃の岸に到りて、最樂至安の地位に住する希望なれども、一たび生死海面に漂うて波を揚げたる上は、習慣性の規則に依りて永く其動勢を保たんとする爲に、此の如く輪廻する譯である、之を池中に石を投して波を起せるに譬ふれば、其動勢を一波より他波に傳へて滿面の波となり、容易に靜水に歸することは出來ぬと同樣であります、若し其靜水を眞如に比し、波動を生滅に比すれば、容易く生死輪廻の道理が分りませう、

第廿六回　多苦多患の人に滿足を與ふるは靈魂不死說にある事

不死説にある事

佛教の生死輪廻は全く因果の規則に依ることは、唯今述べたる通りでありますが、佛教中の漸教と申す方では、永き年月の間生死輪廻を經て、眞如涅槃の世界に到ることを説けども頓教と申す方では、一足飛に生滅界より眞如界に到ることを説きます、此頓教漸教共に此世界は多苦多患の世界なれば、早く生滅界を遠離して眞如界に昇入せんことを勸むるも、拙者の如き此生滅界にありて樂天の悟を開き、日々夜々雲を見、雨を聞きながら、此土寂光の樂を得て居るものには、生滅界より眞如界へ一足飛に進入するよりも、せめて二三界位は輪廻して、色々の生滅界を見物し、後に正しく彼岸に到りたい樣に考へ、東京より京都まで瀛車の力で一飛にするよりも、靜岡や名古屋邊へは立寄つて見たいと思ふも同樣でありますが、斯く申すと頓教就中他力教の人達からは、大に叱られるに相違ない、拙者の宗旨は元來佛教中の他力教と名くる方なれば、縱令生滅界は安樂の妙境であると感じても、相對上の安樂に過ぎませぬ、之に反して他力教の所謂極樂は、絶對上の安樂世界なれば、同日の沙汰でないことは萬々明かでありますが、就ては拙者も慾望は人に負けぬから、一日も早く絶對的極樂界に參りたいと考へます、

今廣く世間の人を見るに得意氣樂滿足安心して居るも

のは實に曉天の星を數ふるよりも猶ほ乏しく、其他は皆不得意不滿足不愉快不安心でありて、憂苦患難の空氣中に生活して居ます、其中には常ょ不幸不運病氣災難貧苦の如き慘風悲雨の間に一生を送るものも、決して尠くはありませぬ、例へは幼にして親を失ひ、老て子に別れ、夫は家産を破りて死し、妻は乳兒を棄てゝ逝り、昨年は病魔に犯され、本年は天災に罹り、一家擧て飢に泣き渴を訴ふるが如き徒に至りては、何に依りて安心の一道を營みませうか、斯る菲命薄運の人に對して、唯物論者の如き靈魂の滅亡を說くも、何等の効力なく、唯益失望に失望を重ねしむる計りであります、苟も世間に立ちて自ら世の風敎を任する學者は、己れの滿足を以て足れりとせず、斯る悲境に呻吟せる人を精神上より救助する道を講じなければ、學者の本分は立つまいと考へます、蓋し此くの如き人を肉躰上より救助するは金持の義務にして、精神上より救助するは、學者の本分でありませう、然るに拙者の視る所では、今日の學者が己れ一人の安心を目的として、廣く社會公衆の安心には意を用ひざる樣に思ひます、拙者は之を學者の利己主義と稱して、金持が己れ一人の酒色の慾に耽りて、他人を顧みざるに均しき樣ょ考へます、先つ今日多數の學者の講する所を察するに、第一ょ不學無智の連中には兎ても分らぬ樣なる事計り述へ立て、ヨシ分り

を却て失望せしむる樣なる事のみを論じて居るかに見受けます、然るに拙者は及ばずながら、己れ一人は朝夕安樂の天地に心を遊ばしむるも、廣く社會の不幸多苦の人に、セメテ精神上の滿足を與へんことを祈念して、先に妖怪の原理を說き、今又靈魂の不滅を論するに至りました、是れ皆悲風苦雨の暗夜を照らす燈臺であります、

第二十七回　人に得意の時と失意の時とある事

靈魂不滅說が如何して多苦多患の人に滿足を與へ得るかの理由は、今少し說明せねばなりますまい、若し人が此一生限りのもので、死後は永く滅無に歸するのであると聞いたならば、生涯不幸不運計りにて此世で滿足を得る見込のないものは、自暴自棄するより外に道はありますまい、左すれば其結局法律に觸れざる限りは、惡は爲し得、罪は作り得と心得て、社會多數の道德は非常に墮落するに相違なく、悖德違倫の極端に陷りませう、若し人皆多少の學德を兼備し、己れに克ちて道を行ふことを得るならばけれども、將來何程一般の敎育が進んでも、多數の人に此一生丈を以て滿足を與ふることを能はざるは明かであると考へます、是に於て靈魂不死說が一般の人に快樂を進め滿足を與へ、從て世間の道德風敎を維持するに力あることの夥しい譯が分りませう。

廣き世間には平素學問もあり、知識もあり、常に樂天主義

にて死後未來等の事は更ゝ頓着せず、神も賴まず佛も信せず、何事も十二分の滿足を得て意氣揚然たるものがありますが、其は得意の時に限り、若し不幸災難等連りゝ起りて、何事も意の如くならず、不愉快不滿足計りになるときは、俄ゝ神ゝ乞ひ佛に願ひ、禁厭祈禱呪術等色々迷ひ出すに至ります、實に人間は意氣地のないものであります、順境ゝある時と逆境にある時と、得意の時代と失意の時代とでは、全く別人の樣に變ります、又年少くして血氣壯あるときと、老い去りて絶望したるときと、人々の決心覺悟の上に大なる相違があります、世間にて極端の宗教嫌の人が極端の宗教信者とありたる例もよく聞くことなるが、唯物的觀察は多く得意の人の得意の時に起る樣に考へられます、依て拙者は此の如き人に失意の時を想像して說を立てられんことを望みます、若し己れ一代中には失意の時なかるべしと思はゝ、世間の失意の人になり代りて考へて見るが宜い、左なければ己れの世界觀人間觀を以て、社會多數の人に滿足を與ふることは出來ませぬ、

拙者の考ふる所によれば、靈魂滅亡論は得意の人の得意の時に適するも、失意の場合に適せず、之ゝ反して不滅論は得意の場合と不得意の場合と雙方に適します、要するに社會の貧富貴賤幸不幸の萬般の人に滿足安心を與ふ

る法は、靈魂不滅論に限ると信じます、就中多苦多患の人には此說を外にして安心を營む道なきは明かであります、何せなれば人間は理性的動物にして、靈魂不滅說はよく其理性に滿足を與ふるからであります、古來宗教がよく人心を固結するは全く此點にあると考へます、

昔し釋迦の法を說かれたるは、學者が理屈を講ずるとは大ゝ相違し、普く一切衆生に平等一味の法樂を與へんとするの目的を以て、賢愚利鈍貧富貴賤等、異種異階の人ゝ安心の一道を授けられたるものが正く佛敎にして、其說は生滅門眞如門に分れ、生滅門にありては流轉輪廻を立て、、轉迷開悟の要路を示されたるものに相違ない、古人の句に君看天上一輪月、無限清光照大千とあるが、釋迦は則ち一輪の月にして、無邊の清光は其口より出てたる無量の法門と見て宜い、其法門が貴賤貧富億万の人に一味の法益を蒙らしむるは、所謂大千を照すに當りませう、然るに今日の學者は得意の境遇にある己れ一人の滿足を本とするが如きは、到底社會多數の人心をして其說に歸依せしむることは出來ませぬ、

第廿八回　靈魂不滅說の人心を強くする事

靈魂不滅說の實際に及ぼす影響は、前述の如く人ゝ滿足を與ふるゝ止らず、人心を強くするに與りて大に力ありと思ひます、人間は一生五十年の浮橋を渡るに、氣の強い

様に見へて案外弱いものである、例へは一事業を爲さんとするに、一度失敗に會すれば、直に落膽して再ひ着手する勇氣がなくなり、遂に永久の失敗となりて終ります、是れ人に忍耐力の缺ける1由ると云ふも、其忍耐力を起す所の根本があるべき道理である、即ち我々の心中に靈魂不滅の決心ありて、此肉躰は如何ならうとも、精神たゞは決して朽ちぬと確信することが、大に忍耐力を鼓舞するに相違ない、殊に善惡因果説が靈魂不滅説に結合して、一層人意を強くするに至ります、故に靈魂不滅は忍耐力に大に關係ありと考へて宜い、從て其説の百般の事業に關係あることが分りませう、

人が災難不幸に逢うて失望せざるも、矢張靈魂不滅説が大に關係することは前既1述べたるが、病氣に當りて人意を強くするに、又大に助けとなるは疑ありませぬ、兎角人は病氣を恐る1ものゝて、其恐る1は必すしも、疼痛の堪ゆ難きにあらず、又貧苦の爲にもあらず、唯病氣により て其壽を短縮するかを恐れます、換言すれば死ぬことを恐る1からでありまず、此樣に病氣を恐るれは却て病氣を重くし、壽命を短縮するより外なきは明かなれとも、其心1信する所がないと、到底其恐を除くことは六ケ布い、其信する所の中では靈魂不滅を信することが最も力を與ふるに相違ない、若し人間が此一生を以て限りとし、死

後不滅の門に入ることが出來ぬとなつたなら五十年の蠟燭が消えんとするほど心細きものはありますまい、中々安心どころか、大迷に迷はねばならぬ、之ゝ反して靈魂不滅と知れば、其死に就くは、毎夜眠りに就くと同ゞく、決して失望も落膽もするに及はず、安心して居ることが出來ます、故に病は何程重くならうとも、平氣の平左衛門で、少しも迷ひ出しもせず、又恐れも致しませぬ、從て病氣も輕くなり、早く平癒する樣になります、

斯くして靈魂不滅説は人に決死の覺悟を與ふるに最も妙であります、故に軍人教育には其精神を固むる方、之より善きはありますまい、我邦も將來歐米の强國と一大戰端を開くことなしとは申されませぬが、其準備ゝは國民全躰ゝ此精神を與ふることと最も肝要であります、其他何事をするにも決死の精神ほど大切のものはありませぬ、

而して其精神は靈魂不滅説より起るとすれば、其説こそ實に國家の獨立を保護するの金城鐵壁にして、富國强兵の基礎と申して宜い、今や漸く内外多事に向ひ、東洋の天地も風雲日に增し急ならんとする折柄なれば、國民擧て國家の爲に一身を犧牲ゝする覺悟を養はねばなりませぬ、拙者などは今日尚ほ微力の一寒生同樣のものなれども、國家將來の廢興存亡に關しては、聊か杞憂を抱くものなれば、專ら靈魂不滅の理を講究して之を國民に傳へ、以

て精神上の砲臺を建設せんことを望むものであります、

第廿九回　靈魂不滅說の良心に滿足を與ふる事

世間には善人もあり惡人もありて、之を制するに國家の法律あれども、其法律に漏るゝ罪人も必ず多いゝ相違ない、且つ法律は惡人を罰する方に力あるも、善人を賞する方には不足である、又志士仁人にして誤りて處刑の身となり、永く獄裏に呻吟し、蓋世の大望を抱きながら、之を伸ふることを能はず、空く涙を呑んで昊天に訴ふるものも、古來決して少なくはありますまい、其中には死後永く寃罪を蒙り、地下にありて瞑するこゝの出來ないものもありませう、自ら惡を犯して刑を受くるは自業自得なれども、

自ら國家の爲に義を唱へ、社會の爲に仁を行ひながら、而も其身は世に容れられずして獄窓に日を送るが如きは、何んと申して宜しからうか、斯る人には人間一代だけで決して滿足を與ふることは出來ませぬ、尤も此點に就ては古來子孫百世の賞罰あることを唱へ、志士仁人の誤りて世に容れられざるも、後世其人に代りて寃を雪ぐものもあり、或は碑を建て史を編み、以て其名をして不朽に傳へしむるものもありて、天網恢々疎にして漏さずとは申すけれども、拙者の視る所にては、尙ほ後人の知らずして天網に漏るゝものも多からんと考へます、唯物論者及靈魂滅亡を唱ふる人達は、如何樣に此點を解しませうか、優

勝劣敗弱肉強食説では却て人をして自暴自棄せしむるより外はありますまい、故に道徳上、人ゝ満足を與ふるゝは、靈魂不滅説によりて善悪の應報は死後必ず來るものと確信せしむるが肝要である、諺ゝも善悪若し報なくんば乾坤必ず私あらんともありて、我々は天地の正理の存する限りは、善悪必ず其報あるべしと信じて、其賞罰を死後永遠に期するものであります、而して天地の正理は宇宙の正理であり、宇宙の正理は善悪應報の規則であり、其規則は全く靈魂不滅に本づくものなれば、我々の安心は靈魂不滅論に由らざれは達すべからざること明かであります、

宇宙の廣大無邊なるは到底我々智力の及ふ所にあらざれとも、我々の理想は宇宙の規律の一定して動かざることと、因果の規則は宇宙の規律なることを知り、善悪應報も亦其正理なることを知り、一身の死後は勿論、社會滅亡し、天地破壞する後までも、此理は嚴然として行はるゝものと固く信じて獄窓の中にあるも非命の死ゝ罹るも、苟も其心は社會國家ゝ對して寸善尺德を施したる記臆なれば、泰然として自ら安んずることが出來ます、是れ全く我々の本來固有する先天的良心の光明が内に發する故でありまず、實に此光明と宇宙の正理が我々の向ふ所の前路を照して、死後永く昭々靈々の世界あることを告げて

くれます、然るに今日學術の實驗は到底此まで達せざれば、我々は唯此良心の指導まに從うて進むより外はありませぬ、我々若し夜靜かまに人定まる時にありて、一室に端坐して人生を觀察し來らば、必ず五十年の壽命の一瞬一息なるを知り、人事の期し難く、社會の恃むに足らざるを知り、之と同時に世間は暗黑にして、我々の良心に滿足を與ふる能はざるを知るに至るに相違ない、又我々が死期に際し、自ら臨終の來るを知り、兄弟妻子に永別を告くるまに當りては、如何なる豪邁の士も人生の墓なきを感じ、世事の非なるを知り、必ず迷ひ出すに相違ない、此時にありて此心を慰むるものは、唯靈魂不滅の一理のみであります、此理はよく我良心の光を助けて、死後永く前路の向ふ所を示し、盡未來際を照して、我々まに無上の安心滿足を與ふるまに至ることを忘れてはなりませぬ、蓋し宗教の一世を感化して風教を裨補する點は、全く此一事であります、

第三十回　歸結

斯くして拙者は、古來世人の最も惑ひ且つ聞かんことを欲する靈魂問題に就て數回を重ねて述へたりしが、今其要領を一括すれば、靈魂滅亡を唱ふる論者に俗人と學者との二種ありて、俗人の方は別に深き考はなく、唯己れの臆斷を以て論ずる迄なれば、之を俗論派と名けて駁擊を加へ、學者の方は專ら西洋の唯物論に由るものなれば、之

を唯物派と稱して其不合理なるを辯明し、次に更に實際上より靈魂不滅論の必要なる所以を開陳致しました、依て理論上及實際上雙方より一通り說明したる積りであります、唯遺憾なることは理論上の說明は宇宙全躰の問題に涉り、時間空間の何たる、世界萬有の何たる、一々證明を要する次第にして、到底之を細論する餘地なければ、破唯物論及其他の著書に讓ることに致しました、又靈魂不滅論に關して、佛敎の善惡因果說、生死輪廻說、地獄極樂說をも略辯するの必要を感じ、一言を加ふるに至りました、」拙者の講演の順序は大略其通りでありますが、是より其論を實施する方法を述ぶるに、人は靈魂の不滅なるを知りたる以上は、時々刻々之を心頭に銘じ、業務の餘暇は勿論、業務中と雖も之を心中に味ひ、一旦人事の意の如くならざることあらば、之に依りて其心を安んじ、又不幸災難の其身に集ることあらば、之に依りて其意を强くする樣に致し、他日國家の大事あるに當りては、之に依て決死の精神を起し、一朝寃罪を蒙る場合には、之に依て良心の光明を點じ、愈臨終に逼らば、之に依て安心瞑目する樣に心掛くるが宜い、斯くして平常社會に立ちて人事を觀するにも之を思ひ、天地を望て風月を觀するにも之を念じ、造次顚沛も此一事をして心頭を離れざらしむるに至らば、人生五十年間は幸福愉快計りで日を送ることが出來ま

す、苦を轉して樂となし、禍を轉して福とする道も蓋し此外にはありますまい、果して然らは此道理を知るものは眞の知者にして、之を知らざるものは眞の愚人と申して差支ありませぬ、已に斯く安心したる上も、人間一生は肺臓と心臓の動く限り、身を勞し心を役して、百難千苦を排して進み、決してグズ〳〵して光陰を徒費することは出來ぬ、何處までも社會の爲に事業と共に斃るゝ決心を持ち、日本國民としては世界無類の國躰を天壤無窮に傳ふることを祈念せなければなりませぬ、一たび靈魂不滅を信する以上は、其決心を抱くも勿論の事にして、若し其決心なきに於ては斷じて靈魂不滅を信ぜざるものと見て宜い、拙者などは微力ながら生涯事業と共に斃るゝ決心なれば、自ら安閑徒然として居ることが出來ぬ計りでなく、人の碁を打ち將棋を指すのを見てすらも、不愉快でたまりませぬ、サウして拙者一已の安心は、靈魂不滅を信するは勿論、山川風月を觀する毎に、世界の幽玄高妙なるを感し、自ら理想の樂を味ひ、佛教の所謂此土寂光の妙趣は蓋し此にあらんかと想像して居ます、若し拙者が山川に對して口吟したる自得の悟道を述ぶれば、左の通りであります、

笑て山色を觀ずれば、山も亦笑ひ、泣て水聲を聽けば、水も亦泣く、若し然らは泣て聽んより、寧ろ笑て觀せよ、

斯く申すと禪宗めきて居ますけれども、人生五十年の旅路の鬱散は、斯る人生觀世界觀の必要を感じ、相對的世界に在てすらも、此の如き愉快ある以上は、絶對的世界即ち眞正の理想世界の愉快は如何計りならんかと推して想像することが出來ます、あなかしこ、

靈魂不滅論附錄

靈魂集說

第一、神道之部

日本書紀神功皇后卷云、神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、

五憲法曰、古儒爲知也、天有帝神有變、地有后祇有化、人有魂魄有奇、物有精靈有怪、皆天有也、

又曰、後儒謂神陰陽之靈、故罔云常躬鎮座、又謂魂氣血之精耳、故議思死魂散滅、是人間理量非神仙知、罔鎮坐、則三輪五瀨不知所立、魂散滅則兇狹芳野云何立、

大成經曰、心者理之魂也、氣者理之身也、乃至其未天與先在常世國、神皆理、

身也、故無欲無迷、故無壽終時、始天祖身是也云云、
天地麗氣府錄曰、眞如界變成金剛寶杵、々々變成風氣、々々轉成神、神變成生、生轉成魂魄、魂魄轉成人體(元々集)、
神代口訣曰、神者嘉牟嘉美也、略云、嘉美、神慮如明鏡之照萬物、不捨一法、不受一塵也、在天者神、在萬物者靈、在人者眞心也、萬物之靈、人之心、清明則神也、儒書云、陽之精氣曰神、陰之精氣曰靈、又曰陽精者上天、陰靈者下根國、
兩部神道口決抄曰、此不生不滅本覺本來之眞心、雖一睡一露無念無相大極之地不增不滅、死又不滅也、
本居宣長曰く、さて死すれば妻子眷屬朋友家財萬事をもふりすて、馴たる此世を永く別れ去て、ふたゝび還り來ることあたはず、かゝらずかの穢き豫美の國に往くことあれば、世の中に死ぬるほどかなしき事はなきものなり、(豫美と申すは地下の根底に在りて、根の國、底の國とも申して甚きたなく惡き國にて、死せる人の罷り往くところなり)、又曰く、譬へば神は人にて、幽事は人のはたらくか如く、世の中の人は人形にて、顯事は其人形の首手足なゞ有て、はたらくか如し(玉匣)、
平田篤胤曰く、人の生るゝ始のこと、死して後の理なゞを推慮りに云ふは、甚も益なき事なれば、只に古傳說を守りて、人の生るゝ事は天津神の奇妙なる產靈の御靈に依て、父母の生なして、死れば其靈永く迷界に歸き居るを、人之を祭れば來り歆る事と、在の儘に心得居りて、强ちに其上に穿鑿でも有るべき物なり、(鬼神新論)
平田又曰く、人死して神魂と亡骸と二つに別たる上にては、骸は汚穢のものゝ限りとなり、さては夜見の國の物に屬く理りなれば、その骸に觸れたる火に汚の出來るなり、また神魂は骸と分りては、あは清く潔かる謂れ有りと見えて、火の汚穢にいみしく忌みろの祭祠を爲すにも汚の

ありてはろの享を受ざるあり、(靈能眞柱)

顯幽順考論に云く、死後の靈魂の在狀を、凡庸とは云ながら小智(コザカシ)き輩が、皇國の古傳說をはじめ、漢說、佛說、蘭說あゞをも麁々聞採りて、さすがに佛說などには泥まざれとも、其諸說の是非當否を分別する事能はざるか故に、死後は只寢入たる間の如き物にして、總て知覺無きものなるべく、心一つに思定めたる徒多かるよしにきこゆるは、尙漢說佛說の染付(シミツキ)たる心の垢の淸まらざればぞかし、若し一向に寢在るか如くにして知覺なき物ぞと云はば、遠き神明の上司正氏が妻女の如きをいかにとする、況や天滿宮、崇德院、金毘羅宮などの靈驗いと皓著あるを如何とか爲る、

辨々道書に云く、淸明なるものは其神魂天に昇りて神明となる、邪曲無道の者は其神魂靈ならずして、降りて幽谷山野に迷ひ、畜身の胎中にも入る、

浦田長民曰、以幽爲宅、以顯爲寓者魂也、魂出幽而來於顯則身生、去顯而歸於幽則身死、幽顯分域而一魂居之、生死殊途而一魂涉之(大道本義)、

撞賢木に曰く、魂は即神なり、神代の神は神にして、其魂またなは神なり、人の唯魂のみ神なる如きにあらず、魂は形あるかと思へばなきか如く、なきかとおもへばたしかにありて奇靈まことに測りかたし、(中畧)斯て生成の功なるときは、其魂天に昇る、本にかへるあり、若し此反なれは、黃泉國へ逐はる、是おほかたの定めになんありける、

於茂秘傳草に曰く、大凡現身の是の我世間に、幽顯の二道あり、顯事は掛まくも畏き天皇命此を領知食し、幽事は大物主神所知食り、然れば吾も他も生の涯、天皇命の大御政に服從ひ、天皇命の大御意を己が意とし、万事を皇朝廷に隨せ奉り、さて壽盡て身死らば、大物主の神慮に服從ひ、其

神の御意を己が意とし、萬事を其神の御思慮に順せ奉らば、さて事もかるべきを、いかなればか此世の外の憂懶を怯れて、覺なき後の榮華を求めむずらむ、

神代教義解に云く、抑も人の生れ出る本は、産靈大神の産靈に因て神魂を降し、父母に託して生しめ給ふ事にて、乃至年老期至て身亡ぬれば、形體は土に歸り、靈魂は天に歸る、是各其本元に歸るにて道理のまゝなり、然るに天神の御教に背き、人たる道に違へば、道理の隨に天に歸ることを能はず、其罪の形狀に從て相當る罰を受く、其賞罰の權を大國主は主り給ふなり、

第二、儒道之部附雜書

黃帝曰、形靡而神不化、

老子曰、谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根、

老子述義曰、神者生之本也、形者生之具也、又曰、原我性命受化於心、心受之於意、意受之於精、精受之於神、形體消而神不毀、性命既而神不終、形體易而神不變、性命化而神常然、

孔子曰、未知生、焉知死、

禮記祭法篇云、孔子曰、人死曰鬼、此五代所不變也、

禮記祭儀篇曰、人生有氣有魂、有魄、氣也者神之盛也、魄也者鬼之盛也、衆生必死、死必歸土、此謂鬼、魂氣歸天、此謂神、

家語云、子貢問於孔子曰、死者有知乎、將無知乎、子曰、吾欲言死之有知、將恐孝子順孫妨生以送死、吾欲言死之無知、恐不孝之子棄其親而不葬、賜不欲知死者有知與無知、非今之急後自知之、

墨子曰、自古以及今、生民以來者亦有嘗見鬼神之物、聞鬼神之聲、則鬼神何謂無乎、若莫聞莫見則鬼神可謂有乎、又曰、凡殺不辜者其得不祥、鬼神之誅

君、此其僭濫也、以君書之說觀之、則鬼神之有豈可疑哉、又曰、古之今之爲鬼非他也、有天鬼、亦有山水鬼神者、亦有人死而爲鬼者云々、

列子曰、精神者天之分、骨骸者地之分、屬天清而散、屬地濁而聚、精神離形各歸其眞、故謂之鬼、鬼者歸也、歸其眞宅、黃帝曰、精神入其門、骨骸反其根、

莊子曰、至人神矣、大澤焚而不能熱、河漠沍而不能寒、又曰、死生亦大矣、而不得與之變、又曰、其鬼不祟、其魂不疲、一心定而萬物服、

左傳曰、能人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂、用物精多則魂魄强、是以有精爽、至於神明匹夫匹夫强死、其魂魄猶能馮依於人、以爲淫厲、況良霄、

史記黃帝本紀注曰、死而不亡謂之神、死而不祀謂之鬼、

賈誼曰、忽然爲人兮、何足控摶、化爲異物兮、亦何足患、若人之形千變萬化、未始有極、忽然爲人矣、化爲異物矣、

抱朴子曰、按九鼎記及青靈經、並云、人物之死俱有鬼也、

文子稱黃帝之言曰、形有靡而神不化、以不化乘化、其變無窮、(弘明集)、

淮南子曰、精神、天之有也、而骨骸、地之有也、精神入其門、而骨骸反其根、我尙何存、

王充論衡曰、夫死人不能爲鬼則亦無所知矣、何以驗之、以未生之時無所知也、人未生在元氣之中、既死復歸元氣、元氣荒忽、人氣在其中、人未生無所知、其死歸無知之本、何能有知乎、

揚子法言曰、或問神、曰心、請聞之、曰潛天而天、潛地而地、天地神明而不測者也、乃至人心其神矣乎、操則存、捨則亡云云、

白虎通曰、魂魄者何謂、魂猶信信也、行不休於外也、主於情、魄者迫然著人、主於性也、

晉書曰、阮修字宣子、好易老、善清言、人有論鬼神有無者、皆以死者有鬼、修獨以爲無、曰今見鬼者、曰着生時之衣服、若人死有鬼、衣服有鬼耶、論者服焉、

韓退之曰、有形而無聲者物有之矣、土石是也、有聲而無形者物有之矣、風霆是也。有聲與形者物有之人獸是也、無聲與形者物有之矣、鬼神是也、

張橫渠曰、聚亦吾躰、散亦吾躰、知死而不亡者可與言性矣、又曰氣生於人、生而不離、死而遊散謂魂、聚而成形質、雖死而不散謂魄、

程明道曰、物生則氣聚、死則散、有聲則須是口、既觸則須是身、其質既壞、又安得有、

程伊川曰、神與性元不相離、則其死也何合之有、又曰魂謂精、魄謂死也、魂歸于天、消散之意、

程子曰、聚爲精氣、散爲遊魂、聚則爲物、散則爲變、觀聚散則鬼神之情狀著矣、萬物之終始不越聚散而已、鬼神者造化之功也、(性理大全)

監田呂氏曰、萬物之生莫不有氣、氣也者神之盛也、莫不有魂、魂也者鬼之盛也、故人亦鬼神之會爾、鬼神者周流天地之間、無所不在、雖寂然不動而有感

必通、雖無形無聲而有所謂昭昭不可欺者、(性理大全)

朱子曰、人鬼之氣則消散而無餘矣、其消散亦有久遠之異、人有不伏其死者、所以既死而此氣不散爲妖爲怪、

朱子曰、蓋死則魂氣上升、而魄形下降、又曰盡則魂氣歸于天、形魄歸于地、而死矣、人將死時熱氣上出、所謂魂升也、下躰游冷、所謂魄降也、又曰、其魂氣發揚于上、又曰、人生時魂魄相交、死則離而各散去、魂爲陽而散上、魄爲陰而降下、(朱子語類)

南軒張氏曰、就人物而言之、聚而生爲神、散而死爲鬼、又就一身而言之、魂氣爲神、躰魄爲鬼、(性理大全)

西山眞氏曰、以人之身論之、生則曰人、死則曰鬼、此生死之大分也、然自其生而言之則自幼而壯、此氣之伸也、自壯而老、自老而死、此又伸而屈也、自其死而言之則魂遊魄降、寂無形兆、此氣之屈也、及子孫享祀以誠感之則又來格、

此又屈而伸也(性理大全)、

小學曰、形既朽滅、神亦飄散、

四聲字音云、鬼人死神魂也、

李屏山曰、人物有形之鬼神、鬼神無形之人物、(鳴道集說)

上蔡曰、人死時氣盡也、

何承天達恰論云、至於生必有死、形斃神散猶春榮秋落、四時代換、奚有於更受形哉、(弘明集)

三敎平心論曰、生死去來、惟意所適、神通變化不可測量、

傳習錄曰、蕭惠問死生之道、先生曰、知晝夜即知死生、問晝夜之道、曰知晝則知夜、曰晝亦有所不知乎、先生曰、汝能知晝矍矍而興、孳孳而食、行不著、習不察、終日昏昏、只是夢晝、惟息息有養、瞬有存、此心惺惺明明、天理無一息間斷、才是能知晝、這便是天德、便是通乎晝夜之道而知、更有甚麼死生、

草木子曰、天主神、地主鬼、神主伸、鬼主屈、伸主聚、屈主散、此二者所以生万物、死万物之大端也、又曰、鬼者人之影、死者生之終、

文海披沙曰、生以形運、而死以神運、

理學類編曰、問人死魄魄便散否、晦菴答曰散矣、

性理字義曰、以生死論、生者氣之伸、死者氣之屈、就死上論、即魂之升者爲神、魄之降者爲鬼、魂氣本乎天、故騰上、體魄本乎地、故降下、又曰、天地之間亦有沈魂滯魄、不得正命、而死者未散、消散、有時或能作怪、但久復自當消耳、

南秋江鬼神論云、人死而何歸、曰體魄歸於地、魂氣歸於天、曰歸而有形乎、曰鬼無形也、有聲乎、曰鬼無聲也、有心乎、曰鬼無心也、乃至天地之氣莫不始而終、至而歸、生而死、而決無終而復始、歸而復生之理、

林羅山曰、人物之生也、皆天地陰陽之所感、生者自息、死者自消、譬如逝川之不舍晝夜、更無一息之間斷也、今年之春非去年之春、樹頭之花非復根之花、

易曰原始反終、故知死生之說、由之觀之無人死再生之義、雖然聚散遲速如火之初滅而烟氣猶鬱乎、故有鬼神之感格、有厲靈之來出、有精爽之依託、有魂魄之流行、而其終由大虛無所不之、何蹤跡之遺有哉、況其人死又託胎乎、佛氏三世之說、今之果夙之因也、今之因後之果也、其要至令人人修善止惡而已、下愚庸昧不悟此意、恐懼疑惑、遂以爲實有三世、是心野狐耳、(神社考)

熊澤蕃山曰、根本天理を稟得て生ずる物なれば、死するとひとしく本然にかへるといへる理あれとも、一度體を稟て靈氣のあつまる所あれば、子たるものゝ哀慕に感し復するにより、かへりやとれる至理昧からず有もの也、其子の哀慕に感じてかへるも、又天理に順ひ、生々不息と相合せることはりあり、(葬祭辨論)

物徂徠曰、由無而之有、謂之神、由有而之無、謂之鬼、惟夫於其之也、可以知鬼神之情狀也、又曰、先正有言、鬼者人之影也、人者鬼之形也、影之與形相肖、人之壽百有二十、鬼之壽亦百有二十、五世而瘞其主、其諸有以取焉乎、大人之生斯世、豈能塊然徒處也、其心志之所周旋、日夜之所鄉往、後其死數十年、而其物具存、自體魄一渝知氣之所馮、其惟于茲乎、鬼與物之相謀、有則俱有也、鬼乎影乎、其莫有自運之力、有以竢乎養也耳、(徂徠集)

貝原益軒曰、天地之氣、人物各資而始生焉、人死則其氣既消散、魂亦殫盡而無餘矣、只有子孫之氣、相繼而不絕耳、(自娛集)

新井白石曰、ろれ水は至て清けれとも、冰を結ぶときは明かならず、神至て明かなれとも、形を結ぶときは明かならず、冰解けては清にかへり、形散じては明に復る、故に覺るは靈ならずして夢は靈に、生るは靈ならずして死するは靈なり、(鬼神論)

佐藤直方曰、魂魄合則生、離則死、又曰神者氣之伸、鬼者氣之屈、氣之方伸者屬陽、故爲神、氣之屈者屬陰、故爲鬼、神者伸也、鬼者歸也、云々、(鬼神集說序)

山片子蘭曰く、人の生するは艸木の萌生するが如し、其死するは枯るゝか如し、又其子あるは種實を蒔て生ずるが如し、すべて一盛一變の道理、生れて段々と陽氣盛むになりても、又終には衰へ、命盡て死し、消散して土に歸す、故に鬼は歸也と云、春種て夏長し秋收るの事にして、これ即ち鬼神の情狀也、

歸正漫錄曰く、覺昏而夢、靈生正而死、神造物之所以使人謹死也、

異端辨正曰く、釋氏又謂、死而精魂不散、復借父精母血以生其形軀、如此則父母之名、皆假托之具、以啓天下後世不慈不孝之心、其忍心害理之言、亦何謬妄哉、

護法資治論曰く、一心其源謂之性、所知覺謂之識、能應物謂之靈、發妙智謂之神、離形遠征謂之遊魂、統屬一心、去來變化無窮無盡、

大和三教論曰く、夫古聖人之教則君子死後昇天作神、故祭有降神、乃至小人則死後歸地作鬼、時或爲變、

閑際筆記ニ云ク、池上入道祖節曰ク、儒者以爲ラク死スルトキハ此身朽チ滅ビ、神モ亦飄散シテ、剉燒舂磨、且ツ施ス所ナシト、然ラズ、夢ヲ以テ之ヲ試ムベシ、高ヨリ墮チ、又ニ傷レテ身ニ與ラズ、然ルニ吾心ニ痛苦ヲ知ル、死後ハ軀殼ナシト雖モ、而モ神魂猶ホ在リ、痛苦安ンゾ知ラザラン哉ト、余曰ク、夢中ニ痛苦ヲ知ルハ、血氣身ニアリ痛ムベキノ理アリ、神魂此レ舍ル、能ク知ル所以ナリ、死セル者ハ土木ノ如シ、痛ムベキノ理ナシ、是理ナケレハ是事ナシ、

大鹽中齋曰く、有形質者、雖大有限、而必滅矣、無形質者、雖微無涯、而亦傳矣、(洗心洞劄記)

大橋訥庵曰ク、彼鬼神ト云ヒ、魂魄ト云ヒ、精神知覺ト云ノ類ハ、如何ニモ靈妙自在ニシテ、擬議ニモ及バザル所アレトモ、是ハ猶氣ニ屬シテ、氣ノ

精ト云ヤデナレバ、ヤハリ屈伸消息アリテ、理ノ動カザルガ如キニ非ズ云云、(闢邪小言)

閑聖漫錄に曰く、動植の物死し枯るゝにも其生の終にして、又死すれば生氣を子に傳ふ、其道の外に死道といふことあるべき理なし、人は生道を盡くして足れり、死道は言ふに及はず、故に孔子も未知生焉知死とのたまへり、人道は生を知るに在のみあり、況や未來を說くは臆度より出たる空言にして、實事はなく人倫に益なし、

安井息軒曰、死者有知乎、我不得而知之也、死者無知乎、我不得而知之也、塊然之形化爲穢土、而魂氣則無所不之乎、我不得而知之也、倏忽乎來、倏忽乎去、禍福糾繩、孰知其極、所可知者、獨生人之道而已、(息軒遺稿)

十返舍一九曰く、無情にして有情に化するものは、腐草化して螢とあるの類、離形にして有形をなすものは、折枝を地にさすに自から根つくが如し、況や人の魂氣存して、異形を露はし靈をあらはす事、各物に著するの情逼する故なり、(怪物輿論)

馬琴云く、神は心なり、鬼は氣なり、人の心氣は形なし、鬼神亦形なし、人の心氣はよく眼目の視る所にあらす、鬼神の見がたきこれを以てしるべし、乃至人死してろの魂魄いまだ散せざる間は、寃鬼となりて人の眼に見ゆることもあるべし、我俗これを幽靈といふ、乃至寃鬼の人に見らるゝも、その魂魄いまだ散せざるあいだにあるべし、其人死して夥の年を經たらんには、魂魄既に散滅す、魂魄散滅して寃鬼とならんと欲するともよくせんや、

鹽尻云、人之初生以七日爲魄、人之初死以七日爲忌、一魄而一魄成、故七々四十九日而七魄具矣、一忌而一魄散、故七々四十九日而七魄散矣、

梅園叢書に云く、死して後は生れざる前の如し、生れさる前吾しらず、死

して後吾いづくんぞしらん、むべなるかな、聖人其しるべき所をもとめて、其知るべからざる所をいはざる事を、

第三、佛教之部

長阿含云、我有罪人、捉令釜煮蓋之、令人守禦、乃至煮死不見神出、故知死無神也、是婆羅門作如是計、迦葉曰、汝若睡時、神識出入、傍人見否、無也、

長阿含云、迦葉婆羅門不信因果、死有地獄、迦葉問曰、何以知無、曰我有親友病重、看之爲曰、若死入地獄者當來相報、至今不來、所以知也、迦葉曰、獄囚有異、何暇能來、如囚赴市人、肯放歸報及妻子、況地獄卒無情者乎、

心地觀經曰、有情輪廻生六道、猶如車輪無始終、

本生心地觀經曰、心如流水、念念生滅、於前後世不暫住故、

法句喩經曰、人死神去、便更受形、然父子因緣合居、譬如寄客、起則離散、愚迷縛著、計爲己有、沈溺生死、唯有慧者不貪恩愛、勤修經戒、滅除識想、生死得盡、

無量壽經曰、生死流轉無有休止、又曰生死無窮已、

灌頂經云、阿難問佛、若人造立墳塔、是人精魂在中以否、佛言亦在、亦不在、阿難又問、云何亦在亦不在、佛言其魂在者、若人生時不種善根、不識三寶、而不爲惡、無善受福、無惡受殃、無善知識、爲其修福、是以精魂在塚塔中、未有去處、是故言在云不在者、或其前生在世之時大修福德、精勤行道、或生天上人間受福、及不信直正、殺盜造罪、墮在畜生餓鬼之中、備受衆苦、經歷地獄、故言不在塚塔中也、

因果經曰、一身死壞、復受一身、生死無量、譬如盡天下草木、斬以爲籌數、其故身不能窮盡、

百喩經云、外道等執於常見、便謂過去未來現在唯是一識無有遷謝、乃至大智諸佛教諸外道除其常見、一切諸法念念生滅、何有一識常恒不變、

維摩經曰、若見生死性、則無生死、無縛無解、不然不滅、

圓覺經曰、心也者冲虛妙休、炳煥靈明、無去無來、冥通三際、非中非外、洞徹十方、不滅不生、豈四山之可害、離性離相、奚五色之能眞、

楞伽經曰、彼生滅者是識、不生不滅者是智、

勝鬘經曰、世間言說、故有死有生、死者諸根壞、生者新諸根起、有如來藏有生有死、如來藏離有爲相、如來藏常住不變、

楞嚴經曰、一切衆生從無始來生死相續、皆由不知常住眞心性淨明躰、用諸妄想、此想不眞、故有輪轉、

占察經曰、衆生心躰從本以來不生不滅、自性清淨無障無礙、猶虛空、

十誦律云、比丘疑火葬殺身中八万戸虫、佛言人死虫亦死、

婆沙論云、待死如寄客去、如至大會、多集福德、故捨命時無畏、復作是念、隨所受身、末後心滅爲死、若爾心念念滅、皆應有畏、非但末後心滅可畏也、

成實論曰、是心念念生滅、不待煩惱、又曰、是心心時即滅、未有垢相、心時滅已、垢何所染、又曰、是相續心、世諦故有、非眞實義、

起信論曰、所謂心性不生不滅、又曰、是眞心常恒不變、

智度論曰、問云、無有生死因緣、何以故、人死歸滅云云、答曰、若汝謂身滅便無者云何、無衆生先世所習憂喜怖畏等、如小兒生時、或啼或笑、先習憂喜、故今無人教而憂喜續生、又如犢子、生知趣乳、猪羊之屬、其生未幾、便知有牝牡之合、子同父母、好醜貧富聰明闇鈍、各各不同也、若無先生因緣者不應有異、如是等種々因緣知有後世、

十二因緣論云、如人臨命終時心識爲因、是故得生後身心識、而彼心識不可說一、亦不離彼、亦不即彼云云、(大藏一覽集)

俱舍論曰、由眼等根有轉變、故諸識轉異、隨根增損、識明昧故云云、

俱舍論曰、死有後在生有前、二者中間有五蘊起、爲至生處故起此身、二趣中間、說名中有、又曰、有生死生、是相續法、如何間絶、言無中有、乃至猶如種果、是

續生、種果無間絕、死生是續生、死生無間絕云云、

唯識論曰、此識性無始時來、刹那果生因滅、果生故非斷、因滅故非常、非斷非常、是緣起理故、

法華玄義曰、心如幻焰、但有名字、名之爲心、適言其有、不見色質、適言其無、復起虛想、不可以有無思度、故名心爲妙、

大乘義章云、生死果報是有不無、故名爲有、乃至報分始趣、名爲生有、命報終謝、名爲死有、生後死前、名爲本有、對死及中、故說爲本、兩身之間所受陰形、名爲中有、

宗鏡錄引顯識經云、識之運轉遷滅往來、猶如風大無色無形不可顯現、乃至衆生身死、識持受覺法界、以至他生、因父母緣而識託之、

宗鏡錄曰、不爲垢法之所染、寧爲淨法之所治、非生死之所藉、豈涅槃之能寂、遂稱識主、故號心王、

義楚六帖云、俱舍曰、漸死足齊心最後意識滅、斷末摩水等下人天不生、

安樂集曰、從無始劫來在此、輪廻無窮、受身無數、又曰輪廻六道受苦樂二報、生死無窮、

牟子理惑論云、鬼神固不滅矣、但身自朽爛耳、身譬如五穀之根葉、鬼神如五穀之種實、根葉生以當死、種實豈有終亡、得道身滅耳、

法苑珠林云、韓詩外傳曰、死爲鬼、鬼者歸也、精氣歸於天、肉歸於土、血歸於水、脈歸於澤、聲歸於雷、乃至呼吸之氣復歸於人、

寶藏論曰、其生也人、其死也魂、相似相續、

原人論云、若生是稟氣而欻有、死是氣散而欻無、則誰爲鬼神乎、且世有鑑達前生追憶往事、則知生前相續非稟氣而欻有、又驗鬼神靈知不斷、則知死後非氣散而欻無、

慧遠形盡神不滅論云、夫神者何耶、精極而爲靈者也、精極者則非卦象之所

圖、故聖人以妙物而爲言云云、(弘明集)

宋宗炳明佛論曰、群生之神、其極雖齊而隨緣遷流、成麤妙之識、而與本不滅矣、今雖舜生於瞽舜之神也、必非瞽之所生、則商均之神、又非舜之所育、生育之前素有麤妙矣、既本立於未生之先、則知不滅於既死之後矣、(弘明集)

宋鄭道子、神不滅論云、夫火因薪則有、火無薪則無、火薪雖所以生火、而非火之本、火本自在、因薪爲用耳、若待薪然後有火、則燧人之前其無火理乎、火本至陽、陽爲火程、故薪是火所寄、非其本也、神形相貴亦猶此矣、(弘明集)

廣弘明集云、若形即是神、神即是形、二者相資、理無偏謝、則神亡之日、形亦應消、而今有知之神亡、無知之形在、此則神本非形、形本非神、不可得强合、如一也云云、

俱舍麟記云、鬼者歸也、謂捨此身歸于後際、

輔教編云、萬物有性情、古今有死生、然而死生性情未始不相因而有之、死固因於生、生固因於情、情固因於性、使萬物而浮沈於生死者、情爲其累也、

尙直編云、神識猶居中之人也、人既出之不顧房屋、神識既出不顧幻身、晦庵所謂形既朽滅、神亦飄散、雖有剉燒舂磨、且無所施、是則惟見幻身生滅、不知神識不消滅也、是猶惟知房屋傾頹、不知屋中之人先出、屋外渾無損也、

盂蘭盆經疏新記云、佛教所宗人以靈識爲本、四大形質爲靈識所依、

同書云、儒謂神靈即佛教識性、靈識不滅、所謂常存、儒教尙形生、事死、葬及祭等禮皆爲重形、言厚形者謂但行祭記、言薄神者謂不嚴去識、若稟佛教則厚神而薄形矣、

佛法金湯錄云、人得天地之形氣而生、所以宰是形氣者、心之神靈也、天地之間凡氣有盡、凡形有滅、惟神靈不屬形氣、故無變滅、乃至天神地祇與人心之神靈、皆不變滅者也、

佛法金湯編云、袁宏以爲人死精靈不滅、隨復受形、生時所行善惡、皆有報應、

又同編云、魏收撰佛老志、略曰、生生之類三世神識常不滅也、凡爲善惡必有報應、漸積勝業陶冶粗部、經無數形滌鍊神明、乃至無生而得佛道、

百法問答抄云、死時六識先滅、七八次死、生時七八先生、六識次生、

秘藏寶鑰曰、生生生暗生、始死死死冥死終、

永覺禪師曰、夫人身一天地也、天地有成壞、而爲天地之主宰者未嘗滅也、故壞而復成、人身有生死、而爲人身之主者未嘗滅也、故死而復生、

往生要集曰、如是展轉作惡受苦、徒生徒死、輪轉無際、如經偈云、一人一劫中所受諸身骨、常積不腐敗、如毗布羅山、一劫尙爾況無量劫、

山堂清話曰、五蘊初起、名之爲生、乃至四大分散、名之爲死、識神隨業旋歸後有、

儒佛合論云、夫死者有再生、則魂神之不滅亦不言而可知焉、乃至鬼神者又家舍之主人也、如家舍雖及朽廢、主人不與其朽廢、而別立生涯也、

童蒙策勵曰、心珠躰本明、在五道而不染、在佛地而不淨、然則一切衆生死此生彼、千變萬化而常不出中道摩尼寶中、

空華隨筆曰、儒家死後魂神飄散之說、弗違西天佛敎而已、亦不合日本神道矣、

犀浦沙彌訓云、死時之心是八識無記心、非六識明了心也、既是無記乃無有苦樂也、

儒佛論肝要抄云、色無定躰、隨心所變也、心好殺生則死墮地獄、乃至苟未滅其心垢、有無數生死千變萬化也、由之幽靈有死、此生彼、譬如人之移易其屋廬、又曰、周公孔子死再無與、化益限一世、所謂死歸天地者、只是空無而已、佛即不然、欲生即生、欲滅即滅、不能天覆、不能地載、

二敎合璧論云、人物ノ精心往テ鬼神トナル、乃至生ルトキハ人物ト云ヒ、

死シテハ鬼神ト成ル、故ニ人物ト鬼神ト一コシテ二、二ニシテ一ナリ、幽ト明ト隔テアルガ故ニ一コシテ二ナリ、精神同キ故ニ二コシテ一ナリ、」角毛偶語ニ云、盧生ガ夢中ニ八十年ノ浮沈行藏アリ、乃至如此一夢ノ前中後冥顯ノ異アレトモ、盧生ガ身ハ一貫セリ、生死相隔テ、幽明別ナレトモ、神識一貫シテ滅セズ、三世ニ相續シテ昇沈無窮ナリ、

叢林集ニ曰ク、外教ニ云、幽靈トハ魂魄神ノコト也、乃至外ニハ魂魄神ノ名アリ、内ニハ心意識ノ異アリ、界趣ニ行ク者ハ心王藏識ナリ、五識心所等ハ身肉五根ニ依ル、根身無キトキハ其識即ナシ、外ニ言フ魂神ハ内ニ言フ五臟ノ精ナリ云云、

護法漫筆ニ云、漢明帝ノ時、佛法始入、聞生々之類、識神不滅之說、以爲怪異奇僻、殊不知延陵季子葬其長子、曰骨肉歸復于天命也、若魂氣則無不之也、無不之也云々、

三教凡例鈔ニ曰、內教所宗人以靈識爲本、四大形質爲靈識所依、(識住則生、識去則死、四大形質其猶館舍焉)又曰、儒者皆執氣聚爲生、氣散爲死、若氣散而歟無則斷滅應無鬼神、蓋鬼神之說儒家許有、若驗鬼神靈知不斷、則知死後非氣散而歟無云々、

七帖見聞ニ云ク、煩惱菩提生死涅槃、皆是レ本迷本悟ノ法門ニシテ、始終ヲ論スルニ無之、諸經論中ニ生死ニ始終アリト見ルハ、皆是權教ノ意ヲ帶シテ此ノ如ク云フナリ、五大院ノ釋ニ云ク、生死海無始無終、虛空海亦復如是矣、

鼎足論ニ云ク、燒則灰、埋則土、何物殘而有之者、不知心性猶水去此往彼湛然常住也、凡人死而成畜、畜死而成人、且生天上墮地下者、在乎三國經史矣、而言滅而無者何也、斷見矣、

雪窓夜話ニ云ク、靈知不昧ノ眞心ハ、人生レテ始メテ生ズルニ非ス、人死